



Title	ケインズ『一般理論』私注 賃金基金説の系譜について(7)
Author(s)	白井, 孝昌
Citation	経済學研究, 36(2), 78-113
Issue Date	1986-09
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/31743
Type	departmental bulletin paper
File Information	36(2)_P78-113.pdf



<研究ノート> ケインズ『一般理論』私注

賃金基金説の系譜について (7)

白 井 孝 昌

リカードの『利潤にかんするエッセイ』¹⁾の内容は、「利潤の理論」と「穀物法問題への応用」の二編に分けることができる。その前編は、さらに「農業ストックの利潤率をめぐる考察」と「資本の一般利潤率をめぐる考察」の二章に分けられるが、われわれはすでにその第I章を構成する31個のパラグラフのすべてを検討し終っている²⁾。

その章はさらに三つの節に分けられた。親友マルサスとの論争の文脈に照らして見るとき、§1「余剰としての利潤と地代の基本的関係」における最も肝要な点は、リカードが利潤を余剰の範疇に属する概念として定義しているところにある。パンフレット『地代の研究』³⁾において、マルサスは農業で雇用される資本の利潤を「当該期間における農業ストックの通常利潤率 (the usual and ordinary rate of the

profits of agricultural stock at the time being)」で見積もって推定し、それを賃金とともに耕作の費用の範疇に加えている。マルサスのそれが「地代の理論」であることを思えば、利潤がこのようにして彼の理論の枠の外側から与えられるのは自然の成り行きというべきであろう。同じ穀物法問題に対するリカードのアプローチが「利潤の理論」に依ってなされたことは、きわめて対照的である。彼の理論では、もはや利潤は与件としてではなく、その理論の枠の中で決定されるべき変数として扱われなくてはならない。そのうえ彼は、地代をも、与件として彼の理論の枠の外に排除するのではなく、利潤とともにその枠の中で決定されるべき変数として扱うのである。こうして、土地の生産物から耕作の費用を差し引いた余剰がそのまま地代となるマルサスの理論と違って、リカードの理論の中核部分には、彼の意味での余剰が利潤と地代とに分裂して行くメカニズムがある。

このメカニズムの最も単純化された数値例による説明が、§2「資本と人口が比例的に増大する過程において、一方で利潤率が低下し、他方で地代が形成される機構の最も単純な事例」で与えられる。そこでは、農業ストックの蓄積過程として現われる耕作の拡張の過程が三つの段階にわたって説明されているが、その基本的要領を知るには、第2段階の説明までで十分である。それゆえ、前々稿「賃金基金説の系譜について(5)」の議論はそこで打ち切られた。

前稿「賃金基金説の系譜について(6)」は、

- 1) David Ricardo, *An Essay on the Influence of a Low Price of Corn on the Profits of Stock* (London: John Murray, 1815), reprinted in *The Works and Correspondence of David Ricardo*, edited by Piero Sraffa, Vol. IV: Pamphlets and Papers 1815-1823 (London: Cambridge University Press, 1952), pp. 1-41.
- 2) 拙稿「賃金基金説の系譜について(5)、および(6)」本誌第35巻第2号(1985年9月), pp. 147 (323)-172 (348), および、第36巻第1号(1986年6月), pp. 73 (73)-106 (106).
- 3) Thomas Robert Malthus, *An Inquiry into the Nature and Progress of Rent, and the Principles by Which It Is Regulated* (London: John Murray, 1851), reprinted in *Thomas Robert Malthus on the Nature and Progress of Rent* (Baltimore: The Johns Hopkins Press, 1903), edited by Jacob H. Hollander.

その第Ⅵ節から第ⅩⅦ節にわたって、リカードの「農業ストックの利潤率をめぐる考察」の§2の後半部分と§3の全部を紹介している。まず第Ⅵ節では前々稿の議論の復習を兼ねて、§2(iv)「耕作の第3段階」を検討した。この項の議論をしめくくるパラグラフ(19)の中で、リカードは「利潤の少ないことが蓄積を抑圧しないならば、地代の上昇と利潤の低下にはほとんどいかなる限界も存在しない」と述べている。われわれは第Ⅶ節で彼のこの陳述を取り上げて、その(傍点で示されている)条件節が、じつは、利潤の低下が農業者の投資意欲を失なわせるために、蓄積を抑圧するという動かし難い事実を強く示唆していることに注目した。低利潤が耕作の拡張過程に立ち現われる主たる限界になるという認識は、耕作の拡張過程を農業ストックの蓄積過程として捉えるリカードの理論の当然の帰結であるとともに、彼の胸中にひそむヴィジョンの顕われでもある。

マルサスが耕作の拡張を連続的な過程として扱っている⁴⁾のに対して、リカードがそれを段階的な過程として捉えているのは、両者の理論に見られる顕著な形式上の相違点である。リカードの§2に示されている耕作の三つの段階は、耕作が新しい土地へと拡散して行くところの粗放的耕作の段階として、まずは説明される。その後で、リカードは§2(v)「集約的な耕作の場合について」において、それら諸段階を新しい土地への資本投下の段階としてではなく、既耕地への追加投資のそれと看做すことにより、彼の理論形式がそのまま集約的耕作過程の説明にも適用できることを示すのである。この議論をわれわれは前稿の第Ⅷ節で紹介した。さらに、マルサスの議論では集約的耕作と粗放

的耕作が同時的、あるいは平行的に進行する状況が取り上げられているが、リカードはそれともまた彼の段階的形式の理論で取り扱えることを§2(vi)で示している。この項をわれわれは第Ⅹ節で見た。

第Ⅹ節では、リカードの§2の最後をしめくくる(vii)「人口増加の自然的限界の影響」における議論を紹介するとともに、次のことを指摘した。マルサスとリカードの理論の大前提として、資本の蓄積と人口の増加が平行的に進行する状況が想定されている。耕作の拡張過程を、農業ストックの蓄積という側面から眺めると、すでに第Ⅶ節で強調しておいたように、蓄積の進行に伴う利潤率の低下が農業者の投資意欲を失なわせることを通じて、耕作の拡張に限界が立ち現われるのであった。それを人口増加の側面から見ると、耕作の拡張には労働供給からくる限界がある。農業ストックの蓄積は、流動資本の増大を通じて、農業労働に対する需要の増加をもたらす。それに見合って労働供給が増加するとき、そして、そのときにかぎって、耕作の拡張は順調に進行することができる。《賃金は労働の需要と供給に依存する——換言すれば、人口と資本に依存する》というジョン・ステュアート・ミルの賃金基金説は、リカードの初期の分配理論のこの場所にぴったりとはめ込むことができるのである。やがて触れるように、リカードの農業ストックの利潤率の決定を論じる最も単純な理論は、労働の賃金率を不変とする想定を必要とするのであるが、賃金基金説は、資本蓄積と人口増加が平行的に進行するという状況のもとで、賃金率の不変性を保証することができる。

リカードの「農業ストックの利潤率をめぐる考察」のクライマックスは§3である。彼はその理論を一つの数値例に具体化し、そうして耕作の第8段階まで計算した数字の中から読み取られる若干の基本原則の説明を、そこで展開するのである。われわれの作成した内容目次によれば、§3はそれぞれ二つのパラグラフから成

4) マルサスの『地代の研究』についてわれわれの作成した目次でいうと、第Ⅳ章「地代の増減を支配する諸法則」の§1「資本蓄積に伴う耕作の進展(粗放的耕作と集約的耕作)」における議論を参照せよ。それを構成するパラグラフ(43)は前々稿〔本誌第35巻第2号(1985年9月), pp. 159(335)–160(336)〕に全文引用されている。

る四つの部分に分けられる。

リカードの数値例では、農業ストックの利潤率は耕作の進展に伴って最初から通減傾向を示すのであるが、その利潤の総額は初期の段階で、蓄積されるストックの増加を反映して、地代とともに増加傾向を示している。しかし、その増加率はしだいに低下して、やがて（第5段階と第6段階の中間で）ゼロに達し、そうして、それ以後はマイナスに転じるのである。こうして、農業ストックの蓄積過程の後期に至ると、利潤総額は、たんに地代との相対的な関係においてのみならず、その絶対額においても減少する。このように、利潤総額が通増傾向から通減傾向へと転じる過程を基本原則の一つと見て、リカードはそれを§3 (i) で強調している。このような転換が起こる直接的な原因は、利潤率の低下率の絶対値が通増的に与えられることに見出される。このことをめぐる一連の議論を、われわれは前稿の第Ⅺ節で述べたのである。そのような結果になるのは、各段階で投下される資本 C_i と、とりわけ、そこから生じる余剰 S_i とを、リカードが等差数列として与えていることが大いに関係する。もしも、それらの系列の変化率を与件とするならば、リカードの諸前提をほぼ満たしながら、利潤総額がけっして減少傾向に転じることはない数値例を作成することができる。われわれはそれを第Ⅻ節で示した。

リカードは§3 (i) のパラグラフ (24) の脚注において、次の命題を提示している。すなわち、「土地に投下されている資本のうち、固定資本の部分がより大きく、そして流動資本の部分がより小さくなるのに比例して地代は増大し、そうして、利潤が減少する速度は遅くなることであろう」⁵⁾ と。この命題は、リカードが各段階で投下される資本 C_i を小麦のクォーター数で表示するとき、それが資本の価値の表示

であることを示している。それは、資本が小麦という単一商品の集合体であるというような奇怪な仮定をリカードが設けるべきであったというような推定の余地を残すものではけっしてない。やがて『経済学と課税の原理』⁶⁾ において明らかにされるように、リカードは固定資本と流動資本の区別を、両範疇の中に含まれる諸商品の耐久度の相違によって画するからである。流動資本のかなりの部分は労働への賃金の前払いに充当される《賃金基金》によって占められているので、たとえば、耕作方法における労働節約的な改良が普及するならば、同じ小麦量で表示される価値を有する資本構成は、「固定資本の部分がより大きく、そして流動資本の部分がより小さく」なるであろう。われわれは前稿の第Ⅻ節において、リカードの数値例にかんするかぎり、このような与件の変化によって、地代の増加率が目立った変動を示さないことを明らかにした。それに対して、そのような与件の変動は利潤の減少する速度をより遅くすることが、第Ⅻ節の前半で確認されて、上掲のリカードの命題が証明されたのである。この命題には、『リカード全集』の編者の注において、上述の内容と異なる解釈が示されているが、それに対するわれわれのコメントが第Ⅻ節の後半で与えられた。

リカードは§3 (ii) で、地代がそれ以前の耕作の諸段階においてすでに発生していた利潤部分からの余剰の移転であって、それは富の新しい創出ではないという彼の主張の根拠を示し

6) David Ricardo, *On the Principles of Political Economy and Taxation* (London: John Murray, Third Edition 1821), reprinted in *The Works and Correspondence of David Ricardo*, edited by Piero Sraffa, Vol. I (London: Cambridge University Press, 1952). とりわけ, Chapter I: On Value, Section V: The principle that value does not vary with the rise or fall of wages, modified also by the unequal durability of capital, and by the unequal rapidity with which it is returned to its employer, の冒頭のパラグラフ (pp. 38-9) を見よ。

5) Ricardo, *op. cit.*, p. 16n. その訳文は前稿〔本誌第36巻第1号 (1986年6月), p. 85 (85)〕にある。

ている。われわれは第XV節をその解説にあてた。

第XVI節ではリカードの § 3 (iii) の議論を紹介した。彼はここで、農業ストックの利潤率が低下する理由は食糧生産に同程度に適する土地が調達できないことにあり、そうして、その事情から生じる生産費の増大が、利潤の低下と地代の上昇の程度を左右すると述べている。われわれは、まず、耕作の各段階における限界地の余剰率 S_n/C_n が通減的であるということが、リカードの理論にとって決定的に重要な前提となっていることを明らかにし、つぎに、それだけのためには、 S_n が通減的であることはかならずしも必要とはされず、その増加率が C_n のそれよりも小さいならば、通増的であってもよいことを指摘したのである。そのような条件のもとで作成される数値例はリカードの数値例ときわめて類似した数値の展開を示すものの、リカードが § 3 (i) で注目した通増から通減へと移る利潤総額の動向の逆転現象を生じさせない。この点に照らして、 S_n を通減的な等差数列として与えるリカードの数値例は、彼の基本的諸前提を超える過剰な内容をひそかに盛り込むことになっているのではないかと疑われるのであるが、じつは § 3 (iii) における彼の議論から、 S_n を通減的に与えることは、彼の理論に必要な条件であることが理解されるのである。

§ 3 におけるリカードの議論の最後をしめくくる (iv) はパラグラフ (30) と (31) から成る。それらにかかわるわれわれの解釈は第XVII節で示された。リカードは最初のパラグラフでこう述べる。すなわち、「富と人口が増大する過程において、もしも穀物の貨幣価格と、そして労働の賃金が少しも変化しなかったとしても、なお利潤は低下し、そうして地代は上昇する」のであるが、「その理由は、原生産物の同量の補給を得るために、より多くの労働者たちが、それだけ遠隔の、あるいは、それだけ肥沃でない土地で雇用されることになる」からである。

彼が二つの表式で示した事態はこのようなものであった。換言すれば、リカードは彼の数値例を作成するに先立ち、穀物の貨幣価格と労働の賃金が不変であると仮定していたことになる。彼はこの仮定によって、小麦を不変の価値尺度として、資本や生産物の価値の表示に使用することができたのである。

彼は最後のパラグラフで、「国民が富裕になるにつれて、そして、その食糧の一部を生産するためにより劣悪な土地に頼らなくてはならなくなるにつれて、穀物の……価格が上昇すること」が動かし難い事実であると承認しながらも、なお、彼の表式で例示される基本原理が実際場面に適用可能であると主張するのである。彼の理論を現実の穀物法問題に適用するとき、穀物の貨幣価格と労働の賃金の変動を考慮せずにすまずことはできない。彼の単純化された数値例において不変の価値尺度として想定される小麦は、もはや不動のものではありえないのである。

こうして、リカードの「利潤の理論」の第I章「農業ストックの利潤率をめぐる考察」とは、穀物の貨幣価格と労働の賃金を不変とする仮定のもとに、小麦を価値尺度として簡明な数値例を農業ストックの蓄積過程について作成し、その中で農業生産物の余剰部分が利潤と地代とに分裂して行くメカニズムを解明しようとするものである。そこでは農業ストックの利潤率は、一方において、諸資本の競争を通じて、その他の諸部門で雇用される資本の利潤率と平準化するとともに、他方において、耕作の限界における余剰率に一致するのである。農業ストックの蓄積過程は耕作の拡張過程と重ね合わせて捉えられているがゆえに、耕作の拡張にともなう限界地の余剰の低下が農業ストックの利潤率の低下を招き、ひいてはその他の諸部門の利潤率をも低下させる。以上の議論は、明らかに、リカードの利潤の理論の中枢部分を構成する。しかし、それは中枢に位置するものではあっても、なお、彼の利潤の理論の一部分でしか

ない。農業ストックの利潤は資本一般の利潤の一つの局面でしかないのである。彼の利潤の理論が、なによりも当時の穀物法問題に適用されるものであったからには、穀物の貨幣価格と労働の賃金を不変とする仮定はやがて取り払われなくてはならず、われわれの議論は最も単純化された数値例から離れなければならない。こうして、本稿で取り上げる彼の「利潤の理論」の第Ⅱ章「資本の一般利潤率をめぐる考察」は、より複雑な局面に入るのである。

XVIII

第Ⅱ章は、われわれの作成した内容目次によると、四つの節に分けられる。そうして、§ 1 には「あらゆる産業における改良から独立に、富の増進が独自に生み出す効果は、まず原生産物と労働の価格を騰貴させ、つぎに賃金の全般的な上昇の帰結として一般利潤率を低下させるという命題をめぐる考察」という見出しが付けられている。その節はパラグラフ(32)から(37)にわたって、そのような全般的な過程を通して、高地代と低利潤という形で、地主階級と資本家階級の間に利害の対立が顕われることを強調するのである。その劈頭を飾るパラグラフには、リカードが『経済学および課税の原理』の著述と改訂の過程で多大の精力をそそぐことになる彼の「価値の理論」の初期的表明が見られる。そうして、それが彼の『利潤にかんするエッセイ』の中に置かれている位置は、『原理』の文脈における「価値の理論」の意味を考えるうえでも、有益な示唆を与えるように思われるのである。彼はこう述べる。

「(32) あらゆる商品の交換価値は、それらの生産の困難さ(difficulties)が増大するにつれて上昇する。そこで、もしも穀物の生産に新しい困難が起こるならば、金、銀、生地、リンネル製品、等を生産するために少しも多く労働が必要とされることはないのにたいして、穀物にはより多くの労働が必要になることから、穀物

の交換価値は他の商品に比較して必然的に上昇するであろう。それとは反対に、穀物の、あるいは、その他のいかなる種類の商品の生産における容易さ(facilities)も同量の生産物をより少ない労働で生み出すことを可能にするであろうから、その交換価値を低下させることであろう*。こうして次のことがわかる。すなわち、農業における、あるいは、耕作器具における改良は穀物の交換価値を低下させ†、そうして、木綿製品の交換価値を低下させ、そうしてまた、鉱業における改良、あるいは、新しい、そして、より豊かな貴金属の鉱脈の発見は金と銀の価値を低下させる、あるいは、同じことになるが、その他のあらゆる商品の価格を騰貴させることができる。競争がその効果を十全に発揮することができて、その商品の生産が、ワインの場合のように自然によって限定されるといったようなことがないところではどこであれ、それらの生産が困難であるか、あるいは容易であるかが、それらの交換価値を窮極において規制するであろう**。そうして、農業におけるか、あるいは製造業における、あらゆる改良とは独立に、富の増進が単独で諸価格に及ぼす効果は、その他すべての商品の価格を従前のままにとどめながら†、原生産物および労働の価格を上昇させるとともに、賃金の全般的な上昇の帰結として、一般利潤を低下させることであるように思われる。」⁷⁾

ここでリカードが、「穀物には多くの労働が必要になることから、穀物の交換価値は他の商品に比較して必然的に上昇するであろう」と述べていることは確かである。しかし、それは、あらゆる商品の交換価値がそれらの生産の困難さ、あるいは容易さの増大により、上昇あるいは低下するという、より一般的な命題から派生する特殊命題であるかのように述べられている。こうして、『利潤にかんするエッセイ』におけるリカードの「価値の理論」は上掲パラグラフ

7) Ricardo, *Works*, Vol. IV, pp. 19-20.

の中の次の一文に集約されるであろう。すなわち、「競争がその効果を十全に発揮することができて、その商品の生産が、ワインの場合のように自然によって限定されるといったようなことがないところではどこであれ、それらの生産が困難であるか、あるいは容易であるかが、それらの交換価値を窮極において規制するであろう。」

『利潤にかんするエッセイ』が1815年の初葉に公刊された後、中1年を置いて、1817年に『経済学および課税の原理』（初版）が出版され、さらに中1年を置いて、その第2版が1819年に、そうしてさらに中1年を置いて、リカード生前の決定版たる第3版が1821年に出されている。この一連の出版と改訂の経過のなかで、『原理』の第1章「価値について」で表現されている彼の「価値の理論」は彼の改訂の手が最も多く掛けられた部分である。『原理』の三つの版の改訂箇所在校合について、『リカード全集』の編者が示した力量は、第1章の中に最も集約的な形で顕われており、また、その章は編者の苦心の作業を生かした緻密な学説的研究が期待される場所でもあるが、ここではとりあえず、以下の論点を述べるにとどめておこう。

『原理』（第3版）の第1章第1節には、「一つの商品の価値、あるいは、それと交換されるその他の商品の数量は、その生産に必要とされる労働の相対的な量に依存するのであって、その労働に対して支払われる賃金の多寡に依存するのではない」という見出しが付けられており、それは21個のパラグラフから構成されている。いま、それらのパラグラフに通し番号を付して、われわれの議論に必要な部分を以下に抄訳する。

「(3) 諸商品が効用を有するならば、それらの交換価値は二つの源泉から生じる。すなわち、それらの稀少性からと、それらを調達するのに必要とされる労働量からとである。

(6) 諸商品について、それらの交換価値について、そしてまた、それらの相対価格を規制

する法則について語るとき、われわれがつねに念頭に置くところのものは、人間労働の努力によってその数量を増大させることができるとともに、競争が何の制約を受けることなくその生産に作用するような商品だけである。

(7) 社会の初期的段階において、これらの商品の交換価値、あるいは、ある商品が別の商品との交換においてどれだけの量で与えられるかを決定するところの規則性 (rule) は、それらの各々に投下される労働の相対量に、ほとんどもっぱら依存するのである。⁸⁾

「(10) もしも諸商品の中に具体化している労働が、それらの交換価値を規制するとするなら、その労働量が増加すること、それが投下されるところの商品の価値は増大するのではなくてはならない。そうして、その減少は価値を下下させるのではなくてはならない。」⁹⁾

以上に引用した文章は、初版から第3版までを通じてほぼ同じ形を保っているところのものであるが、そこには、それらの商品の生産に必要とされる、あるいは、それらに投下される、あるいはまた、それらの中に具体化している労働がそれらの交換価値を規制すると直截に述べられており、そこにはもはや、『利潤にかんするエッセイ』における「それらの生産の困難さ、あるいは容易さ」という表現は見出せない。もっとも、第3版に至って、第1章第1節にはパラグラフ (18) 以下の四つのパラグラフが新たに付加されたのであるが¹⁰⁾、それらのうちのパラグラフ (19) にはこう述べられている。

「(19) 1 オンスの金が上述のあらゆる商品の、そして、その他の多数の商品の、以前よりも少ない数量と交換されるようになってしまっていることを、もしも私が見出すとしたならば、そうして、そのうえに、新しく、かつ、より豊かな鉱脈の発見によって、あるいは、機械

8) Ricardo, *Works*, Vol. I, p. 12.

9) *Ibid.*, p. 13.

10) *Ibid.*, p. 17, n. 3 を見よ。

を非常に有利に使用することによって、所定量の金が以前よりも少ない労働量で得られるようになっているのを、もしも私が見出すとしたならば、私には次のように述べる正当な理由があるであろう。すなわち、金の価値がその他の諸商品に対して相対的に変化した原因は、その生産の容易さの増大 (the greater facility of its production), あるいは、それを調達するのに必要とされる労働量の減少であると言うことができる。同様に、もしも労働がその他のあらゆる商品に対して相対的に、その価値を大幅に低下させるとしたならば、そうして、その低下が、穀物および労働者のその他の必需品が生産されるところの容易さの増大 (the great facility with which corn, and the other necessities ... were produced) によって助長される豊かな供給の帰結であることを、もしも私が見出すとしたならば、私が次のように述べることは正しいであろうと考えられる。すなわち、穀物と必需品は、それらの生産に必要とされる労働量の減少の帰結として、価値が低下したのであり、そうして、労働者を維持するための供給がこのように容易になること (this facility of providing for the support of the labourer) が、労働の価値の低下にみちびいたのであると。〕¹¹⁾ (傍点筆者)

なるほど、『利潤にかんするエッセイ』における「生産の容易さ」という表現は、ここに見られるような形で、『原理』(第3版)の中に復活してはいる。しかし、それはもはや、投下労働を価値の決定因子として明確に打ち出すに至った彼の「価値の理論」の基調を変化させるほどの重みを持ってはいないのである。

われわれは『利潤にかんするエッセイ』のパラグラフ (32) に戻って、そこでリカードが諸商品の交換価値を規制するものは「それらの生産の困難さ、あるいは、容易さ」であるという表現を採っている理由を考えてみよう。もちろん

ん、彼の文脈の中で、この表現は、「それらの生産に必要とされる労働量の多寡」という表現とほとんど同義であることは否定できないのではあるけれども。

その理由は、すくなくとも、次の二つの事柄にかかわりがあるであろう。その一つは、彼の初期の「利潤の理論」の中枢部に位置する『農業ストックの利潤率』の決定機構の最も単純化した数値例を作成するにあたり、彼が小麦を価値の標準として採用したことである。そうして、いま一つの事情は、農業ストックの蓄積過程の進行にともなって、その利潤率が低下傾向を示すことの主たる原因を、耕作の拡張に伴う農業生産の困難さの増大に求めたことである。この二つの事柄は、すくなくとも『利潤にかんするエッセイ』において中心的な重要性を賦与されているので、そこに盛り込まれるすべての議論は、できるかぎり、これらの事情と統一的に扱われることが望まれる。それは、彼の「価値の理論」についても例外ではなく、「諸商品の交換価値がそれらの生産の困難さによって規制される」という表現を採るとき、この理論は農業ストックの利潤率を規制する原理と軌を一にするものと看做されるのである。そうして、初期のリカードにとっても、小麦、あるいは穀物が不変の価値標準ではありえないことは明白な事実であったにしても、彼の「利潤の理論」を穀物法問題に適用するかぎりにおいて、穀物をいちおう価値標準と想定することには許容の余地が十分にあったのであろう。しかし、より一般的な課題を有する『経済学および課税の原理』に至ると、穀物ははじめから価値標準としての資格を剝奪されるのである。その第1章第1節でリカードはこう述べている。

「(11) アダム・スミスは交換価値をきわめて正確に定義した。そうして、また、それを首尾一貫させるためには、あらゆる商品はそれらの生産に投下される労働量の多寡に比例して、価値がより多く、あるいは、より少なくなると主張しなくてはならなかったのであるが、彼は

11) Ibid., p. 18.

自ら別に価値標準の尺度を設定したうえで、諸商品はそれらと交換される標準の尺度たる物の量が多いか少ないかに比例して、より多くの、あるいは、より少ない価値を有すると述べている。彼は標準的な尺度として、あるときは穀物を、またあるときは労働を用いている。そうして、いかなる商品であれ、その生産に投下される労働量ではなくて、それがその市場で支配することのできる労働量を用いている。あたかも、これらの労働量が二つの同等な表現であるかのように……。

(12) もしもこのことがほんとうに真であるとしたならば、もしもその労働者の受け取る報酬が彼の生産するところのものとつねに比例するとしたならば、ある商品に投下される労働量と、その商品をもって購買できる労働量は等しくなることであろう。そうして、どちらの労働量でも、その他の諸商品の(価値の)変化を正確に測定することができるであろう。しかし、それらは等しくはないのである。そうして、前者は意外に多くの事情のもとで、その他の商品の(価値の)変化を正確に表示する不変の標準となるのであるが、後者は、それと比較されるところの諸商品に劣らず頻繁に変動する。アダム・スミスは、その他の諸商品の変動的な価値を確定するという目的のために、金や銀というような可変的な媒介物が不十分なものであることをみごとに指摘した後で、彼自身が穀物、あるいは労働を価値尺度とすることによって、金や銀に劣らず可変的な媒介物を選択してしまったのである。』¹²⁾

ここでリカードがスミスについて述べていることは、そのまま、『利潤にかんするエッセイ』において小麦を価値尺度として選んだリカード自身にもあてはまることである。したがって、彼は『経済学および課税の原理』に至って、スミスと同じ態度を捨てたわけである。彼は、もちろん、労働を価値尺度とすることもできな

い。では、何を価値尺度とするのか。

彼は『原理』(第3版)に至って新しく第I章に付け加えた第VI節「価値の不変な尺度」の中でこう述べる。

「(68) 諸商品の相対的な価値が変化したとき、それらのうちのどれが実物的価値において低下し、また、どれが上昇したかを確定する手段を有することが望まれるであろう。そうして、このことは、それらの商品をつぎつぎに、ある不変の価値標準の尺度と比較することによって、はじめて実行することができるのである。この価値尺度そのものは、その他の諸商品がさらされるところの諸変動のいずれを蒙ることがあってもならない。このような尺度となるものを手に入れることは不可能である。なぜなら、その価値が確定されるべき諸商品と同じ(価値の)変動にさらされることのない商品はないからである。すなわち、その生産のために必要とされる労働量が増減しない商品はないからである。しかも、かりに尺度とされるある商品についてその価値を変動させるこのような原因を取り除くことができたとしても——たとえば、かりにわが国の貨幣の生産において、つねに同一の労働量を必要とするようなことが可能であったとしても、なお、それは完全な標準、あるいは、不変の価値尺度にはならないであろう。なぜなら、私がすでに説明に努めてきたように、それを生産するのに、そうして、われわれが価値の変化を確定したいと欲するその他の諸商品を生産するのに必要とされるところの固定資本の割合が異なるという理由によって、それは賃金の上昇下落からくる相対的な(価値の)変動を蒙ることになるであろうからである。……これらのすべての事情が、考えられるいかなる商品からも、完全に正確な価値尺度たる資格を奪うのである。』¹³⁾

このような事態をすべて承認したうえで、とりわけ、金もその例外たりえないことを承認し

12) *Ibid.*, pp. 13-4.

13) *Ibid.*, pp. 43-4.

たうえて、リカードはなおも金に若干の希望を託すのである。彼はこう述べる。

「(70) ……もしも (価値の) 変動のこのような重要な原因が金の生産から取り除かれるものと想定するならば、われわれは理論上考えるものにきわめて近い価値標準の尺度への近似物を手に入れることになるであろう。金は、大概の商品の生産において雇用される2種の資本の割合の平均値に最も近い割合でもって生産される商品であると考えることができないであろうか。……」¹⁴⁾

「(71) そうして、もしも私自身が不変の標準にきわめて近い一つの標準を手に入れていると想定してよいならば、その利点は次のようになる。すなわち、私はつねに、価格と価値を計測する尺度となるこの媒介物の価値について起こりうる変化によって当惑させられることなしに、その他の諸商品の (価値の) 変化を論じることができるのである。

(72) そうして、私は、金で造られる貨幣が、その他の商品の (価値の) 変動の大概のものを免かれないということを十分に認めるのではあるけれども、この研究の目的の達成を容易にするために、以下の議論において、その価値が不変であると想定するであろう。そうして、それゆえに、価格のあらゆる変化は、私が論じる当該商品の価値の変化によって惹き起こされるものと想定するのである。」¹⁵⁾

先に触れたように、以上の引用部分は『原理』の初版と第2版には見られないものである。それらの版において、これらの引用部分に対応する陳述を求める読者は、第1章第1節の末尾に付せられてある『リカード全集』の編者の脚注¹⁶⁾を参照することができるであろうが、そこに収録されている文章は上の引用部分の内容のすべてを含むものではない。しかしながら、『原理』の第II章「地代について」と第VII章

「利潤について」の二つの章の内容を検討するならば、リカードがすでに初版の段階で、穀物を不変の価値尺度として想定する『利潤にかんするエッセイ』の表式の立場を捨てて、「金で造られる貨幣」を不変の価値尺度として想定する立場を採っていることは明らかである。そこでは、農業ストックの利潤率の決定機構を単純化して作成した、あのみごとな数値例は捨て去られ、地代と利潤は、それぞれ独自の章で分離して論じられているのである。

XIX

リカードの『利潤にかんするエッセイ』のパラグラフ (32) の冒頭を飾る三つの文章は、彼の価値の理論の基本的原理を述べている。まず第1の文章で、「あらゆる商品の交換価値は、それらの生産の困難さ (difficulties) が増大するにつれて上昇する」という原則が提示され、第2の文章では、その原則を穀物の生産に適用して、「もしも穀物の生産に新しい困難が起こるならば、金、銀、生地、リンネル製品、等を生産するために少しも多く労働が必要とされることはないのにたいして、穀物にはより多くの労働が必要になることから、穀物の交換価値は他の商品に比較して必然的に上昇するであろう」と、より詳細に条件設定の仕方が例示される。この第2の文章の中に「商品の生産に必要とされる労働」の概念が見出されることから、われわれは前節において、やがて彼の『経済学および課税の原理』に結実する価値の理論の記述形式に目をやったのである。

さて、第3の文章で、「生産の困難さ」の反対語として、「生産の容易さ」という用語が導入される。すると、彼の原則は次のような形で述べられる。すなわち、「穀物の、あるいは、その他のいかなる種類の生産における容易さ (facilities) も同量の生産物をより少ない労働で生み出すことを可能にするであろうから、その交換価値を低下させることであろう*」と。

14) *Ibid.*, p. 45.

15) *Ibid.*, p. 46.

16) *Ibid.*, p. 17, n. 3.

そうして、この文章には、次のような脚注が付けられている。

「*農業の改良によって惹き起こされる穀物価格の低下は利潤を増大させ、そうして、蓄積を助長することによって、人口に刺戟を与えることであろうが、そのことは再び穀物の価格を上昇させ、そうして、利潤を低下させるであろう。しかし、以前よりも増大している人口を、同じ穀物価格、同じ利潤、そして同じ地代のもとで維持することができるであろう。農業の改良は、そのばあい、利潤を増大させ、そして、地代を一時的に減少させると言てよい。」¹⁷⁾

この注からわかるように、リカードが「生産の容易さ」と言うとき、彼は何よりもまず、農業の改良を念頭に置いているのである。そうして、彼の価値の理論の原則にしたがえば、生産の容易さはその商品の交換価値を低下させるのであるが、それが穀物の生産に適用される場合、与件とされる人口のありかたに影響が及ぶと考えられるために、その原則の指示するところとは異なる結果が生じうることを、この脚注は示唆するのである。以下、本節では、この脚注の中に示されている論理を検討するであろう。

農業の改良の効果について、リカードはすでに、『利潤にかんするエッセイ』のパラグラフ(8)、およびパラグラフ(10)に付せられている脚注*において論じている¹⁸⁾。さらに、われわれは前稿の第XIII節において、リカードのパラグラフ(24)の脚注†の後半に述べられてある命題を検討したとき、「固定資本の割合が大きく、そして流動資本の割合が小さくなる」原因として、耕作方法における労働節約的な改良の普及を想定したのであるが、リカード自身はその原因を特定していない。彼がそのパラグラフ(7)で述べているように、「人口が資本よ

りも急速な率で増大して、賃金が低下すること」¹⁹⁾がその原因にもなりうるのである。

さて、リカードは彼の「利潤の理論」の第I章の§1「余剰としての利潤と地代の基本的関係について」の後半で、蓄積の進行過程における与件の設定の仕方によって、農業ストックの利潤率が同じ水準にとどまり続けること〔パラグラフ(6)〕も、上昇すること〔パラグラフ(7)と(8)〕も、そしてまた、低下すること〔パラグラフ(9)〕もありうるという諸事情を列挙しているのであった。そうして、彼はその議論をこう締め括ったのである。

「(10) これらは、多かれ少なかれ、つねに作用している諸事情である——それらは利潤を上昇、あるいは低下させることによって富の増進の自然的効果を遅滞させたり、あるいは加速させたりすることもある——が、その土地の上で同じ資本を雇用しながら、食糧の供給を増加、あるいは減少させることによって作用する。」²⁰⁾

このパラグラフの末尾に付せられてある脚注は次の通りである。

「*マルサス氏はこう考えておられる。すなわち、賃金の低下か、あるいは、農業の改良の帰結として得られる生産物の余剰は地代を上昇させる諸原因の一つである、と。私には、それは利潤を増大させるだけであるように思われる。

『最高の自然的肥沃性と最高の立地的優位性を有する土地の上で、資本を雇用する諸手段を越えて資本が蓄積されると、利潤は必然的に低下するにちがいない。と同時に、人口が生存資料を越えて増大する傾向は、一定の時間の後に、労働の賃金を低下させるにちがいない。』

『生産費はこうして減少するであろうが、しかし、生産物の価値、すなわち、それが支配することのできる労働量、および穀物以外の生産物の量、は減少するのではなくて、増大するで

17) Ricardo, *Works*, Vol. IV, p. 19n.

18) *Ibid.*, p. 11 and p. 11n. パラグラフ(8)と

(10)の訳文は前々稿〔本誌第35巻第2号(1985年9月), p. 163(339)〕に示されているが、後者

へのリカードの脚注はそこでは省略されている。

19) 本誌, 第32巻第5号(1985年9月), pp. 162(338)-163(339).

20) Ricardo, *Works*, Vol. IV, p. 11.

あろう。』

『生存資料を需要するとともに、有益でありうるならばどのような仕方であれ役務を提供する用意のある人々の数が増大するであろう。それゆえ、食糧の交換価値は生産費を越えて上昇するであろうが、この費用の中にはその土地の上で雇用されているストックの十分な利潤(the full profits of the stock)として当期の現実の利潤率に従って見積られるものが含まれる。そうして、この超過分が地代である。』
— *An Inquiry into the Nature and Progress of Rent*, page 18.

19ページでは、ポーランドについて述べているが、地代の諸原因の一つが、ここでもまた労働の低廉さのせいになされている。22ページでは、労働の賃金の低下が、あるいは、農業の改良の帰結として、所定の量を生産するのに必要とされる労働者数が減少することが、地代を上昇させるであろうと述べられている。²¹⁾

この注の中に引用されている三つのパラグラフの出所は、マルサスの『地代の研究』の18ページと指示されている。そのパンフレットについてはわれわれが作成した内容目次²²⁾によると、マルサスのそれらの文章は、その第Ⅲ章「地代の性質と起源」において論じられている。原生産物の価格を騰貴させる三つの原因のうちの最後のものを説明する§4「肥沃な土地の相対的稀少性について」からの引用である。第1の引用文は、マルサスのパラグラフ(35)の末尾の文章であり、第2のものは、彼のパラグラフ(36)の前半部分であって、それらの大部分は『地代の研究』の17ページに位置する。そうして、第3の引用文は、マルサスのパラグラフ(36)の後半部分であって、それが『地代の研究』の18ページに見出されるのである²³⁾。

21) *Ibid.*, pp. 11n-12n.

22) 本誌、第35巻第2号(1985年9月), pp. 151(327)-153(329).

23) Malthus, *op. cit.*, p. 12. マルサスのパラグラフ(35)および(36)は前々稿[本誌第35巻第2号, p. 156(332)]に引用されている。

リカードの注の冒頭にある彼自身の文章から、われわれは二つの事柄を読み取ることができるであろう。まず第1に、与件の変化としての「賃金の低下」と「農業の改良」は、マルサスの理論とリカードのそのいずれに照らしても、農業における余剰を増大させるという意味で、同じ範疇に属するものと考えることができる。

第2の点は、その文章に明示的に述べられているように、これらの与件の変化によって惹き起こされる余剰の増加が地代と利潤に及ぼす効果について、リカードとマルサスの間に考え方の相違が見られることである。すでに、両者の理論形式をかなり詳しく見てきたわれわれの目には、その相違の原因の所在は明白である。マルサスの「地代の理論」では、利潤は与件として耕作の費用の中に含まれているから、農業生産の余剰はすべて地代となるように定義されている。したがって、余剰の増加は、そのまま地代の増加になると考えられるのである。リカードの「利潤(と地代)の理論」では、彼の定義する余剰が利潤と地代に分裂するメカニズムに焦点が当てられ、そうして、耕作の限界地の余剰が農業ストックの利潤を規制するのであったから、その余剰の増加は、何よりもまず、農業ストックの利潤率を上昇させることになる。ここまでは、彼の「利潤の理論」の第Ⅰ章を検討し終わっているわれわれには容易に理解できるところである。しかしながら、彼とマルサスとの間の論争点は、農業ストックの利潤率ではなく、資本の一般利潤率にかかわっているのであるから、これらの与件の変動の効果の分析は、より広い文脈の中でなされなければならない。本稿で扱うリカードの「利潤の理論」の第Ⅱ章「資本の一般利潤率をめぐる考察」の課題は、まさに、そのような分析を進めることにある。そうして、リカードの理論の一つが、彼のこの注の中にこう述べられているのである。すなわち、「私には、それは利潤を増大させるだけであるように思われる」と。この注の付せら

れているパラグラフ (10) は、われわれの作成した目次によれば、第 I 章「農業ストックの利潤率をめぐる考察」の中に含まれているけれども、この注の置かれている文脈に照らして、リカードがここで言うところの「利潤」が資本一般の利潤であることに疑いの余地はない。

こうして、われわれは第 II 章に立ち戻り、リカードのパラグラフ (32) の末尾に付せられていた脚注*に、もう一度、目を向けなくてはならない。まず、そこでリカードが、「農業の改良によって惹き起こされる穀物価格の低下は利潤を増大させ」²⁴⁾ と述べていることに注目しよう。さらに、この文章が農業ストックの利潤に限定して述べられたものであるとしたならば、穀物価格の低下は耕作の限界地の余剰の減少を招き、利潤を低下させることになるであろう。しかし、この文章もまた、資本一般の利潤にかかわる陳述なのである。

農業の改良は、何よりもまず、農業部門の余剰を増加させる。そうして、それが耕作の限界地の余剰を増加させるのに応じて、農業ストックの利潤率が上昇するのが、その最も直接的な効果である。こうして、異例の高さに上った農業ストックの利潤率と、製造業や商業のその他の部門で雇用されている資本の利潤率との間の格差は、諸資本の競争を通じて平準化される。競争の効果が十分に出つくすと、一時的に異例の高さに上った農業ストックの利潤率は正常な高さに戻るのである。

この一連の過程について、われわれはすでに前稿の第 XIII 節で論じたことがある²⁵⁾。それをここで復習してみよう。労働節約的な耕作方法の改良によって生じた、耕地 1 区画当たりの余剰の増加分 α が、地代総額に及ぼす効果は

$$R_n^0 \longrightarrow R_n^\alpha \longrightarrow R_{n+1}^\alpha$$

という過程をとって顕われるのであった。ここで、記号 R_n^0 は、まだ改良が行なわれていない

($\alpha = 0$) という与件のもとにおける地代総額を表わすのであるが、そのときの耕作の限界は第 n 区画であり、利潤率はその限界区画の余剰率 S_n/C_n に等しい。次に、改良が普及した後、すべての区画の余剰が、それぞれ α だけ増加すると、第 n 区画の余剰率は $(S_n + \alpha)/C_n$ に上昇する。そうして、農業部門に新しく追加の資本が雇用されて、耕地の拡張が進められるまでは、この区画がなお限界地となるから、農業ストックの利潤率だけが一時的に $(S_n + \alpha)/C_n$ という異例の高さを示すのである。この期間の地代総額が記号 R_n^α で表示されている。 R_n^0 と R_n^α の定義にしたがって計算すると、

$$R_n^\alpha - R_n^0 = \alpha \sum_{i=1}^n C_i \left(\frac{1}{C_i} - \frac{1}{C_n} \right) > 0$$

であったから²⁶⁾、 R_n^α はつねに R_n^0 よりも大きい。すなわち、改良の直接的効果として、農業ストックの利潤率が異例の高まりを見せるとき、地代は増大するのである。その増加分の大きさは、余剰の増加分 α に比例する。そうして、それは最初に与えられている余剰の系列 $S_1, S_2, \dots, S_n$ からは、いかなる意味においても、独立である。それは、投下される資本の系列 $C_1, C_2, \dots, C_n$ の与え方に依存している。とりわけ、それを通増的な系列として与えるリカードの前提が、地代の増加を保証しているのである。

次に、異例の高まりを見せた農業ストックの利潤率に惹かれて、他の部門から資本が農業に流入すると、耕作の拡張が始まり、そうして、それが第 $n+1$ 段階に達したところで諸資本の競争の効果が出つくすものと想定しよう。そうすると、第 $n+1$ 区画が耕作の限界地となるから、その区画の余剰率 $(S_{n+1} + \alpha)/C_{n+1}$ が農業ストックの利潤率になるであろう。リカードの前提によれば、各区画の余剰率は区画番号の進行とともに低下する。すなわち、

$$\frac{S_n}{C_n} > \frac{S_{n+1}}{C_{n+1}}$$

26) 同上、p. 92 (92) を見よ。

24) Ricardo, *op. cit.*, p. 19n.

25) 本誌第36巻1号 (1986年6月), p. 93 (93) を見よ。

それゆえ、

$$\frac{S_n + \alpha}{C_n} > \frac{S_{n+1} + \alpha}{C_{n+1}}$$

が成立する。こうして、当初、異例の高まりを見せて $(S_n + \alpha)/C_n$ の水準に達した農業ストックの利潤率は、諸資本の競争の結果として、 $(S_{n+1} + \alpha)/C_{n+1}$ の水準にまで低下するのである。

こうして、農業の改良の普及の後に成立する正常な利潤率と、改良以前に成立していた正常な利潤率 S_n/C_n を比較して、前者が後者よりも低くならない条件は

$$\frac{S_n}{C_n} \leq \frac{S_{n+1} + \alpha}{C_{n+1}}$$

であるが、この不等式を α について解くと、

$$(S_n - S_{n+1}) + \frac{C_{n+1} - C_n}{C_n} \leq \alpha$$

を得る。この不等式の左辺第1項は、改良前の限界地の余剰と、その限界のすぐ外側に位置する土地の改良前の余剰との差であり、そして、その左辺第2項は第 n 区画から第 $n+1$ 区画へいたる投下資本の増加率である。両者の和よりも α が小さくないならば、農業の改良によって正常な利潤率は上昇することはあっても、低下することはないわけである。たとえば、リカードの数値例によると

$$S_n - S_{n+1} = 10$$

$$C_{n+1} - C_n = 10$$

さらに第6区画について見れば、 $C_6 = 250$ であるから

$$\frac{C_7 - C_6}{C_6} = 0.04$$

となって、上の不等式は

$$10.04 \leq \alpha$$

である。

われわれは前稿の議論において、 $\alpha = 10$ と与えたのであるが、この数値は上の条件を満足しない。すなわち、前稿におけるわれわれの数値例では、農業の改良によって正常な利潤率が以前の水準よりも低下することになっていたわけである。しかし、それは非常にきわどいところ

であって、たとえば、 $\alpha = 10.1$ とするならば、事態は逆転して、農業の改良が正常な利潤率を高める結果になる。

さて、改良の普及の後に成立する正常な利潤 $(S_{n+1} + \alpha)/C_{n+1}$ のもとで地主の手に渡る地代総額を記号 R_{n+1}^α で表わし、それと R_n^α との定義にしたがって計算すると、

$$R_{n+1}^\alpha - R_n^\alpha = \left(\frac{S_n + \alpha}{C_n} - \frac{S_{n+1} + \alpha}{C_{n+1}} \right) \sum_{i=1}^n C_i > 0$$

となって、 R_{n+1}^α はつねに R_n^α よりも大きいのである。そうなることを保証するものは、耕作の拡張につれて新しい限界地として耕作される区画の余剰率が通減するというリカードの前提である。そうして、この過程における地代の増加分の大きさは投下される資本の総額に比例することがわかる。

こうして、労働節約的な耕作方法の改良が農業部門の余剰を1区画当たり α (クォーター) だけ増加させるものとする、まず農業ストックの利潤率が一時的に上昇し、そうして、そのことが誘発させる諸資本の競争を通じて、農業ストックの利潤率は、ふたたび低下する。全部門で雇用されている諸資本の利潤率が平準化して成立する正常な利潤率が、改良以前のそれよりも高くなるか、あるいは低くなるかは、余剰の増加分 α の値が大きいか、あるいは小さいかに依存する。以上の全過程を通じて、地代総額はつねに増大する。そうして、諸資本の競争が効果を顯わす以前の局面での地代の増加は余剰の増加分 α に比例し、それ以後の局面では、地代の増加分は投下されている資本の総額に比例するのである。以上が、前稿第XIII節でとりあげたモデルの中に含蓄されていたところのものである。

しかしながら、リカードが「利潤の理論」の第I章「農業ストックの利潤率をめぐる考察」の中で一つの数値例によって示した理論は「穀物の貨幣価格と、そして労働の賃金」を不変とする仮定に立つものであることを、われわれは

前稿の第XVII節で指摘したのである²⁷⁾。いまわれわれが考えようとしているリカードのパラグラフ (32) の脚注*の文章が置かれている文脈では、農業の改良において穀物価格の低下が惹き起こされる事態を考慮に入れなければならない。彼の「価値の理論」によれば、農業の改良による穀物の生産の《容易さ》の増大は穀物の交換価値の低下を、そして、想定されている条件のもとでは、穀物の価格を低下させるのである。そうして、それは賃金費用の減少にみちびき、すくなくとも農業以外の諸部門で雇用されている諸資本の利潤率を高める作用を有するであろう。他方、農業部門ではそれは生産物価格の低下でもあるから、農業ストックの利潤率はむしろ低下するかもしれない。もし低下するとするなら、それは穀物価格不変の仮定のもとに成立する水準 $(S_{n+1} + \alpha)/C_{n+1}$ よりも低下するのである。しかし、このような利潤率の低下は農業で雇用されている資本をその他の諸部門へと流出させることになる。このような調整過程を通じて、農業ストックの利潤率は、 $(S_{n+1} + \alpha)/C_{n+1}$ の水準よりも高くなっているその他の諸部門の利潤率に向けて平準化するのである。そうして、その他の諸部門の比重が大きければ大きいほど、農業ストックの利潤率はより高い利潤率のほうに引きつけられて、資本の一般利潤率の水準は高くなるであろう。このようにして、リカードの述べているように、「農業の改良によって惹き起こされる穀物価格の低下は利潤を増大させるのである。

さらにリカードによれば、このような資本の一般利潤率の高まりは「蓄積を助長することによって、人口に刺戟を与えることであろうが、そのことは再び穀物の価格を上昇させ、そうして、利潤率を低下させるであろう。」²⁸⁾すなわち、資本の一般利潤率の高まりによって、資本一般の蓄積、とりわけ農業ストックの蓄積が助長されることは、耕作の拡張が促進されること

であり、その帰結としての原生産物の生産量の増大は人口の生存資料の供給を豊かにして、人口の増加をもたらすのである。こうして生じる人口のいっそうの増加は、一度低下した穀物の価格を再度上昇させるであろう。そうして、かつて穀物の価格の低下が資本の一般利潤率を上昇させたのと同じ論理によって、この穀物価格の上昇は資本の一般利潤を低下させることになる。

マルサスとリカードの理論の大前提として、資本の蓄積と人口の増加が歩調を合わせて進行する状態が想定されていることを、われわれはすでに何度か述べてきた。とりわけ、リカードの理論について言えば、彼の「利潤の理論」の第I章「農業ストックの利潤率をめぐる考察」において提示された数値例の表式の背後には、耕作の拡張という形で進む農業ストックの蓄積に人口の増加が歩調を合わせて進むことが想定されている²⁹⁾。そうして、その表式の枠組の中では、農業ストックの蓄積の進行とともに、その蓄積率〔前稿では記号 $r(n)$ で表わされている〕はしだいに低下するのであるから、リカードは人口の増加率が農業ストックの蓄積率に見合って低下するという前提に立つことになるであろう。

ところで、穀物の価格の変動を顧慮しながら農業の改良の効果を分析する当面の場合には、その改良は、当初、資本の一般利潤率を上昇させることによって資本の蓄積を助長するとともに、人口の増加を加速させるから、資本の蓄積率と人口の増加率は、上述の「穀物の貨幣価格と、そして労働の賃金」を不変と仮定する表式の場合よりも、すくなくとも一時的に高まると想定されるわけである。そうして、この新しい条件のもとで、さらに、穀物価格と、利潤、および地代の調整が進む過程が考察される。すな

27) 同上, pp. 102 (102)-106 (106).

28) Ricardo, *op. cit.*, p. 19n.

29) その前提はリカードのパラグラフ (11) に明示的に述べられている。*Ibid.*, p. 12. そのパラグラフの訳文は、本誌第35巻第2号, pp. 164 (340)-165 (341)にある。

わち、農業の改良の直接的効果としていったん低下した穀物価格は、人口増加率の上昇を契機として上昇に転じ、そうして、このような穀物価格の上昇は資本の一般利潤率を、ふたたび低下させることになる。このとき、人口増加率の上昇によって増加する人口はどのようにして維持されるのか。それについてリカードはこう述べている。すなわち、「しかし、以前よりも大きくなっている人口は、同じ穀物価格、同じ利潤、および同じ地代のもとで維持することができるであろう」³⁰⁾と。

この文章には、いまいし解説が必要とされるであろう。前稿第XIII節で扱ったリカードのパラグラフ(24)の脚注†の命題における与件の変化の効果は、すなわち、耕作方法の労働節約的な改良が利潤と地代に及ぼす効果は、

$$\frac{S_n}{C_n} \longrightarrow \frac{S_n + \alpha}{C_n} \longrightarrow \frac{S_{n+1} + \alpha}{C_{n+1}}$$

および、

$$R_n^0 \longrightarrow R_n^a \longrightarrow R_{n+1}^a$$

という一連の経過として顯われるのであったが、その場合には、穀物の価格が不変に保たれるという条件が課されていることを想起しよう。それに対して、リカードのパラグラフ(32)の脚注*にかんする当面の議論では、農業の改良によって穀物の価格が低下する余地が顧慮されなくてはならないのである。しかも、前者の場合から後者の場合に議論が移るとき、その議論の焦点は農業ストックの利潤率から資本の一般利潤率へと移っている。その理由の一つは、穀物価格の低下が費用の低下を通じて農業以外の諸部門の利潤率を上昇させる効果を考慮に入れないわけにはいかなることにある。なるほど、前者の場合について上掲の記号で表示した過程の出発点と終着点における利潤率 S_n/C_n と $(S_{n+1} + \alpha)/C_{n+1}$ は資本の一般利潤率とも一致しているのではあるけれども、この過程の焦点はあくまでも農業ストックの利潤率に当てられているのである。なぜなら、改良の直後に異

例の高まりを見せる農業ストックの利潤率 $(S_n + \alpha)/C_n$ はもはや資本の一般利潤率から乖離してしまっていて、しかも、リカードの議論の中で一般利潤率は背景に退けられているからである。後者の場合、すなわち、われわれの当面の問題においては、逆に、一般利潤率が前面に登場して、農業ストックの利潤率は背景に退いていることが、何よりもまず認識されなくてはならない。

さて、リカードが上掲の文章で「同じ穀物価格、同じ利潤、そして同じ地代のもとで」と述べるとき、その比較の基準になっている状態は農業の改良が起こる以前の状態であるから、そのときの利潤率を S_n/C_n 、また地代を R_n^0 と、これまで用いてきた記号で表示することができる。そうして、同じ穀物価格とは、資本 C_i と余剰 S_i が推定される基礎となっている穀物価格の値であって、いまそれを P_0 と表記しよう。この穀物価格 P_0 (と労働の賃金) を不変と仮定するとき、耕作方法の労働節約的な改良は、農業ストックの利潤率と地代に対して上掲の記号表示の経過として顯われる効果を及ぼすのであった。

しかし、リカードの「価値の理論」に従って、農業の改良が穀物の価格を低下させるとき、資本と余剰の推定の基礎が変化するため、同じ数値例によって機械的に議論を進めるわけには行かなくなるのである。たとえば、改良以前において、利潤率が S_n/C_n のとき、地代は

$$R_n^0 = \sum_{i=1}^{n-1} (S_i - \frac{S_n}{C_n} C_i)$$

であり、そうして改良直後、穀物の価格が不変であるかぎりにおいて、農業ストックの利潤率は $(S_n + \alpha)/C_n$ となり、そのとき地代は

$$R_n^a = \sum_{i=1}^{n-1} (S_i + \alpha - \frac{S_n + \alpha}{C_n} C_i)$$

となるのであったが、穀物の価格が変化すると資本と余剰の推定値が変化するだけでなく、改良の効果を $S_n + \alpha$ という形に分離して表現することもできなくなる。そこで、いま、穀物価

30) *Ibid.*, p. 19n.

格 P_0 のもとで各区画の余剰を α だけ増加させる効果を有する改良の後に、変化する穀物価格 P に依存して推定される資本 $\tilde{C}_i$ と余剰 $\tilde{S}_i$ を次のような関数として定義することができるものと仮定しよう。すなわち、

$$\left. \begin{aligned} \tilde{C}_i &= f_i(P; \alpha), \\ \tilde{S}_i &= g_i(P; \alpha), \end{aligned} \right\} i=1, 2, \dots, n$$

である。そうして、これらの関数について、改良以前の穀物価格 P_0 のもとで、

$$f_i(P_0; 0) = C_i = f_i(P_0; \alpha)$$

$$g_i(P_0; 0) = S_i$$

$$g_i(P_0; \alpha) = S_i + \alpha$$

が成立するものと仮定しよう。そうすると、改良以前における資本の一般利潤率と地代はそれぞれ次のように表現することができる。すなわち、

$$\begin{aligned} \frac{S_n}{C_n} &= \frac{g_n(P_0; 0)}{f_n(P_0; 0)}, \\ R_n^0 &= \sum_{i=1}^{n-1} \left\{ g_i(P_0; 0) \right. \\ &\quad \left. - \frac{g_n(P_0; 0)}{f_n(P_0; 0)} f_i(P_0; 0) \right\} \end{aligned}$$

いまかりに、改良直後の穀物価格 P_0 がまだ低下しないでいる状態を考えてみると、そのとき農業ストックの利潤率は資本の一般利潤率から乖離して、

$$\frac{S_n + \alpha}{C_n} = \frac{g_n(P_0; \alpha)}{f_n(P_0; \alpha)}$$

に上昇し、そのときの地代は

$$\begin{aligned} R_n^\alpha &= \sum_{i=1}^{n-1} \left\{ g_i(P_0; \alpha) \right. \\ &\quad \left. - \frac{g_n(P_0; \alpha)}{f_n(P_0; \alpha)} f_i(P_0; \alpha) \right\} \end{aligned}$$

へと増大する。以上は、われわれの新しい関数記号 f_i および g_i の意味を説明するために、それを第Ⅳ節で検討した過程の前半に適用してみたまでのことである。これらの新しい記号の目的は、その過程を分析することにあるのではない。

リカードの「価値の理論」によれば、農業の改良の普及により穀物の生産の容易さが増大すると穀物の交換価値は低下する。そうして、当

面想定されている条件のもとでは、それは穀物の貨幣価格 P の低下として顕われることになる。われわれの考察対象となっている調整過程では、まず穀物の価格は、こうして、 P_0 から、たとえば P_1 に向けて低下するのであった。その間、資本の一般利潤率は上昇するが、それが資本一般の蓄積を刺激し、人口増加率を高める。そうして、人口の増加はやがて穀物価格の低下傾向を逆転させ、調整過程の後半の局面が発生するのである。すなわち、そこでは穀物の価格は P_1 から P_0 に向けて上昇するのであった。こうして、われわれの考察する調整過程では、穀物の価格が $P_0 \rightarrow P_1 \rightarrow P_0$ と一回の振動を示すのである。

そこで、まず、この過程の前半局面、すなわち、穀物の価格 P が P_0 の水準から P_1 へと低下する局面について考えることにしよう。いま、議論を簡明にするために、この過程では諸資本の競争がきわめて強力に作用するため農業ストックの利潤が資本の一般利潤率から乖離することはないと仮定する。さらに、この局面において耕作の限界がつねに第 n 段階にとどまるとするならば、そこで成立する資本の一般利潤率の水準は

$$\frac{g_n(P; \alpha)}{f_n(P; \alpha)}$$

と表わすことができるであろう。

この過程の出発点を時点 t_0 とする。農業の改良の最初の効果はこの時点で発生するのであるが、そのとき、余剰の量のみならず、穀物の価格と資本の一般利潤率に不連続な変化が生じる事情をまず説明しよう。改良の最初の効果が顕われるまでの穀物価格の水準は P_0 であり、それに対応して成立している資本の一般利潤率は

$$\frac{g_n(P_0; 0)}{f_n(P_0; 0)} = \frac{S_n}{C_n}$$

である。いまかりに、改良の効果が顕われるときに、穀物価格が P_0 の水準にとどまり、諸資本の競争も当面作用していないと仮定したなら

ば、農業ストックの利潤率だけが

$$\frac{g_n(P_0; \alpha)}{f_n(P_0; \alpha)} = \frac{S_n + \alpha}{C_n}$$

の水準に異例の高まりを見せることはすでに述べたところである。しかし、われわれの考察しようとしている局面では、このような効果は顕われない。まず、余剰の増加分 α の発生と同時に、穀物の価格は、リカードの「価値の理論」にしたがって、ある程度、低下して、たとえば水準 $\hat{P}_0$ になると仮定されるからである。もっとも、穀物の価格に対する改良の効果がすべて出尽くすまでには、かなりの長さにわたる時間の経過が必要とされるのであり、そうして、この時点では穀物の価格は P_1 の水準までは低下しないものと仮定する。すなわち、

$$P_0 > \hat{P}_0 > P_1$$

が成立するものと仮定する。こうして、まず、時点 t_0 において、穀物の価格は P_0 の水準から $\hat{P}_0$ へと不連続な動きを示すものと想定する。穀物の価格は農業にとっては生産物の価格であるから、農業生産の余剰が顕著に減少し、農業ストックの利潤率は $(S_n + \alpha)/C_n$ の水準よりも低くなるであろう。また、その他の諸部門にとっては、穀物価格の低下は費用の減少を意味し、そこで雇用される諸資本の利潤率を、当初の水準 S_n/C_n よりも高くさせる。これらもまた、時点 t_0 において起こる効果であると想定しよう。そうして、最後に、諸資本の競争の作用が諸利潤率を平準化させ、結局、資本の一般利潤率は

$$\frac{g_n(\hat{P}_0; \alpha)}{f_n(\hat{P}_0; \alpha)}$$

に落ち着くものとする。したがって、

$$\frac{S_n}{C_n} < \frac{g_n(\hat{P}_0; \alpha)}{f_n(\hat{P}_0; \alpha)} < \frac{S_n + \alpha}{C_n}$$

が成立する。こうして、資本の一般利潤率もまた、時点 t_0 において、 S_n/C_n から上掲の新しい水準へと不連続な移行を示すのである。

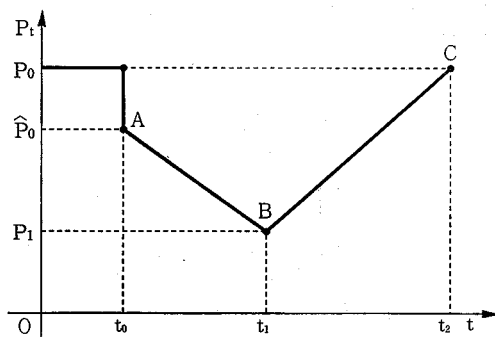
以上で、出発点 t_0 における与件の変化と、それに対する即時的な調整のあり方を設定し終

わったので、次に、利潤率の調整過程の前半局面を考えることにしよう。その局面では時間 t が出発点 t_0 から t_1 の時点まで経過し、そうして、改良の効果が穀物価格の水準の P_0 から P_1 までの低下となって顕われるのである。いま議論を簡明にするために、穀物の価格 P_t が時間 t の経過に比例して変化するものと仮定すれば、次の方程式が成立する。すなわち、

$t_0 < t < t_1$ なる t に対して、

$$P_t = \frac{P_1 - \hat{P}_0}{t_1 - t_0} (t - t_0) + \hat{P}_0$$

この方程式をグラフで表わすと、第1図の線分 AB となる。この図において、横軸にとられる



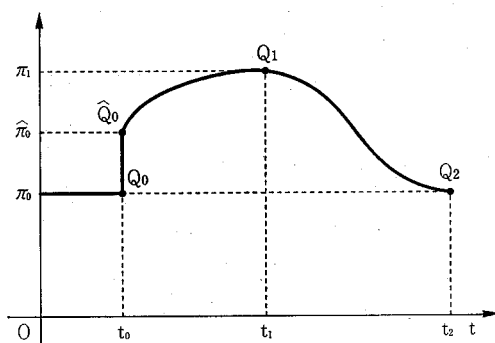
第1図

時間 t が時点 t_0 から t_1 へと経過するにつれて、縦軸にとられる穀物価格 P_t は点 A の水準 $\hat{P}_0$ から点 B の水準 P_1 に向かって一直線に降下する。この方程式を満足する穀物価格を P_t と表記すると、前半局面における資本の一般利潤率は

$$\frac{g_n(P_t; \alpha)}{f_n(P_t; \alpha)}$$

と書き表わされる。この利潤率が、時間 t の経過 ($t_0 \rightarrow t_1$) とともに、すなわち、穀物価格 P_t の低下 ($\hat{P}_0 \rightarrow P_1$) とともに、しだいに上昇するのである。そうして、その主たる理由は、穀物価格の低下は費用の低下として、農業以外の諸部門で雇用される資本の利潤率を上昇させることにあった。こうして、前半局面における資本の一般利潤率の時間経路をグラフにし

て示すと、たとえば、第2図の曲線部分 $\hat{Q}_0 Q_1$



第2図

のように描くことができるであろう。この図では、横軸に沿って時間 t が、そうして、縦軸には資本の一般利潤率 π_i が測られている。

第2図に照らして、以上論じた前半局面における利潤率の推移を、次のようにまとめることができる。すなわち、時点 t_0 において、最初に顕われる改良の効果は、利潤率を当初の水準 $\pi_0 (= S_n/C_n)$ から、新しい水準 $\hat{\pi}_0 (= \frac{g_n(\hat{P}_0; \alpha)}{f_n(\hat{P}_0; \alpha)})$ へと飛躍させる。そうして、時間の経過とともに、利潤率は関数

$$\frac{g_n(P_i; \alpha)}{f_n(P_i; \alpha)}$$

に従って上昇して行き、時点 t_1 において、水準 $\pi_1 (= \frac{g_n(P_1; \alpha)}{f_n(P_1; \alpha)})$ に達するわけである。

穀物価格の低下が進み、やがて P_1 の水準に達するころになると、それに随伴して起こる利潤率の上昇の作用が、資本一般の蓄積を助長することを通して、人口に及び、その増加率が高まることによって、穀物に対する需要が増大し、結局、穀物価格の動向を上昇に転じるにいたるであろう。そうして、穀物価格の上昇は、農業以外の諸部門にとっては、費用の上昇として利潤率の低下を意味する。こうして、調整過程は後半の局面に入るのである。しかし、この局面では、資本一般の蓄積率と人口の増加率がともに上昇するという形で事件が変化してしまっているの、利潤率の時間経路は、前半局面

のそれを逆に辿るということにならないであろう。したがって、耕地の各区分に投下されて農業ストックに具体化している資本と、そこから生み出される余剰の価値を表現する関数の形は、前半局面のものとは異なるものにならざるをえない。そこで、後半局面、すなわち、時点 t_1 から t_2 にいたる過程での、第 i 区分の資本と余剰の価値を、それぞれ、

$$F_i(P_i; \alpha),$$

$$G_i(P_i; \alpha)$$

と表わすことにしよう。それらは、前半局面の関数 f_i および g_i とは異なる関数であるけれども、時点 t_1 において穀物の価格が P_1 の水準に達するとき、前半局面の関数と同じ値をとるものでなくてはならない。すなわち、時点 t_1 において、

$$\left. \begin{aligned} F_i(P_1; \alpha) &= f_i(P_1; \alpha) \\ G_i(P_1; \alpha) &= F_i(P_1; \alpha) \end{aligned} \right\} i=1, 2, \dots, n.$$

である。

さて、後半局面においても、穀物価格の上昇は時間の経過に比例して進むものと仮定すると、両者の間には次の関係が成立する。すなわち、

$$t_1 < t < t_2 \text{ なる } t \text{ に対して}$$

$$P_t = \frac{P_0 - P_1}{t_2 - t_1} (t - t_1) + P_1$$

この方程式のグラフは第1図の線分 BC で表わされる。すなわち、時間 t が時点 t_1 から t_2 へと経過するにつれて、穀物価格 P_t は点 B の水準 P_1 から点 C の水準 P_0 へと一直線に上昇するのである。いま、上の方程式を満足する価格を、前半局面のそれと同じ記号 P_t で表示すると、後半局面 ($t_1 \rightarrow t_2$) における資本の一般利潤率の時間経路は

$$\frac{G_n(P_i; \alpha)}{F_n(P_i; \alpha)}$$

によって表わされる。そうして、リカードの議論に従えば、それは、時間の経過とともに穀物価格が上昇することによって、低下して行くはずである。さらに、リカードの議論に従うなら

ば、後半局面の関数 F_i および G_i は、終着点 t_2 において、改良の効果が最初に顕われる以前の資本と余剰の価値と同じ値をとらなくてはならない。すなわち、

$$F_i(P_0; \alpha) = C_i = f_i(P_0; 0)$$

$$G_i(P_0; \alpha) = S_i = g_i(P_0; 0)$$

でなければならない。すると、われわれの過程の終着点 t_2 において、資本の一般利潤率は

$$\frac{G_n(P_0; \alpha)}{F_n(P_0; \alpha)} = \frac{S_n}{C_n}$$

となって、農業の改良が生じる以前の水準に戻るわけである。このような、後半局面における利潤率の時間経路は、たとえば、第2図の曲線部分 $Q_1 Q_2$ のように描くことができるかもしれない。こうして、点 Q_0 から始まる農業の改良への調整過程において、資本の一般利潤率が辿る時間経路は、軌跡 $Q_0 \hat{Q}_0 Q_1 Q_2$ によって例示される。この過程の途中で、資本の一般利潤率は一時的な高まりを見せるものの、窮極において、改良以前の水準 S_n/C_n に落ち着くように事態の経過を設定することができたわけである。

いま終着点 t_2 における地代総額を $\tilde{R}_n^a$ と表わすと、

$$\begin{aligned} \tilde{R}_n^a &= \sum_{i=1}^{n-1} \left\{ G_i(P_0; \alpha) - \frac{G_n(P_0; \alpha)}{F_n(P_0; \alpha)} F_i(P_0; \alpha) \right\} \\ &= \sum_{i=1}^{n-1} \left\{ g_i(P_0; 0) - \frac{g_n(P_0; 0)}{f_n(P_0; 0)} f_i(P_0; 0) \right\} \\ &= \sum_{i=1}^{n-1} \left(S_i - \frac{S_n}{C_n} C_i \right) \\ &= R_n^0 \end{aligned}$$

と書くことができるから、それは出発点 t_0 以前の地代総額に等しい。

こうして、農業の改良が利潤と地代に影響を及ぼす全過程の出発点 t_0 以前の状態と、終着点 t_2 の状態とにおいて、穀物の価格は同じ水準 P_0 に、資本の一般利潤率も同じ水準 S_n/C_n に、そうして、地代も上に示したように同じ値になっている。とくに農業部門の状態を見ると耕作の限界地はつねに第 n 区画であるから、それは時点 t_0 以前と時点 t_2 とで変わりなく、

各区画に投下される資本の価値額も、 t_0 以前と t_2 とでは同じ値 C_i である。そして、このことは、農業部門には、この過程の途中における人口増加率の高まりによって増加した部分に対応する労働力を吸収する余地がないことを示している。それらの労働力は、すべて農業以外の諸部門で雇用されているはずである。他方、時点 t_0 以前における各区画の余剰は S_i であるが、それ以後、とりわけ時点 t_2 における各区画の余剰は $S_i + \alpha$ に増加している。利潤率と農業ストックの総額が t_0 以前と t_2 とで同じであるから、それらの積になる農業利潤の総額も同じである。したがって、時点 t_2 における農業利潤総額と地代総額の和は、 t_0 以前におけるその和の大きさ $\sum_{i=1}^n S_i$ に等しい。しかるに、 t_0 以後、とりわけ時点 t_2 における余剰総額は $\sum_{i=1}^n S_i + \alpha n$ に増大しているのであるから、そのうちの αn に当たる余剰増加分は、 t_2 において農業部門から流出してしまっているわけである。すなわち、 αn に当たる余剰はその他の諸部門の流動資本（あるいは貸金基金）として蓄積されて、労働力の増加分の雇用を通して、人口の増加分の維持に充てられているのである。

以上の説明によって、リカードのパラグラフ (32) に付せられている脚注*の前半部分の意味は明確に理解されるであろう。繰り返し引用すると、リカードはこう述べているのであった。すなわち、

「* 農業の改良によって惹き起こされる穀物価格の低下は利潤を増大させ、そうして、蓄積を助長することによって、人口に刺戟を与えることであろうが、そのことは再び穀物の価格を上昇させ、そうして、利潤を低下させるであろう。しかし、以前よりも増大している人口を、同じ穀物価格、同じ利潤、そして同じ地代のもとで維持することができるであろう」³¹⁾ (傍点筆者) と。

この一節の最後の文章の原文は次のようにな

31) Ibid.

っている。すなわち、

“But a larger population could be maintained at the same price of corn, the same profits, and the same rents.”

われわれは上述の解説において、この文章における「同じ利潤」(the same profits)を同じ利潤率と解釈し、「同じ地代」(the same rents)を同じ地代総額と理解したのである。リカードは「利潤」(profits)という言葉で、時に、利潤率を、また時に、利潤総額を意味する用語習慣を有していたように思われる。その語がどちらの意味で用いられているかは、それが置かれている文脈に沿って注意深く判断するほかないであろう。

じっさい、上の文章に続いて、リカードはこの脚注をこう結んでいる。すなわち、

「農業の改良は、そのばあい、利潤を増大させ、そして、地代を一時的に減少させると言ってよい」³²⁾と。

この文章の原文はこうである。

“Improvements in agriculture may then be said to increase profits, and to lower for a time rents.”

われわれは、ここで増大させられる「利潤」(profits)を、利潤率ではなく、利潤総額と、それも農業部門だけのそれではなく、全部門にわたる利潤総額と解釈するのである。時点 t_0 以前と、時点 t_2 とにおいて、資本の一般利潤率は同じ水準 S_n/C_n にある。そうして、農業部門で雇用されている資本総額も、 t_0 以前と t_2 とにおいて同じ $\sum_{i=1}^n C_i$ であるから、農業部門の利潤総額も同じ値

$$\frac{S_n}{C_n} \sum_{i=1}^n C_i$$

である。しかし、その他の諸部門では、時点 t_2 において雇用されている資本は、すくなくとも αn だけは増大しているので、全部門を通じての利潤総額は、すくなくとも

$$\frac{S_n}{C_n} \alpha n$$

だけは増大しているわけである。

最後に、農業の改良が「地代を一時的に減少させる」というリカードの主張を検討しておこう。彼がパラグラフ (10) の脚注 * において、「農業の改良の帰結として得られる生産物の余剰は地代を上昇させる諸原因の一つである」というマルサスの主張に対して、「私には、それは利潤を増大させるだけであるように思われる」と述べていることは、すでに見たところである。各区画の余剰と同じように、限界地である第 n 区画の余剰が α だけ増加すると、それはそのまま農業ストックの利潤の増加となつて、限界内のすべての区画の利潤を増加させるから、一見したところ、農業ストックの利潤総額の増加分は αn となり、それは余剰の増加分のすべてを吸収して、結局、地代総額は改良以前のままとどまるかに思われるかもしれない。しかし、われわれはすでに前稿において、

$$R_n^\alpha - R_n^0 = \alpha \sum_{i=1}^{n-1} C_i \left(\frac{1}{C_i} - \frac{1}{C_n} \right) > 0$$

であることを見ている³³⁾。こうして、リカードが各区画に投下される資本 C_i が通増することを前提とすかぎり、そうして、穀物の価格を不変とするかぎりにおいて、農業の改良の帰結として得られる余剰の増加分 αn の一部分は地代に吸収されて、地代を増加させることが明らかである。上掲の等式は、また次のように書き直すこともできる。すなわち、

$$R_n^\alpha - R_n^0 = \frac{\alpha(n-1)}{C_n} \left(C_n - \frac{1}{n-1} \sum_{i=1}^{n-1} C_i \right)$$

こうして見ると、 C_i の系列を通増的であると仮定することは、改良の効果として地代が増大するための十分条件であっても、必要条件ではなく、たとえば

$$C_n > \frac{1}{n-1} \sum_{i=1}^{n-1} C_i$$

なる不等式が成立するだけでも、同じ結果が保証されることがわかる。リカードの表式を支え

32) *Ibid.*

33) 本誌第36巻1号, p. 92 (92).

る諸前提のもとで、農業の改良の帰結としての余剰の増加が利潤を増加させるだけであるためには、

$$C_n = \frac{1}{n-1} \sum_{i=1}^{n-1} C_i$$

でなくてはならないけれども、この等式は C_i を通増的とするリカードの前提と両立しない。

農業の改良の効果が、穀物の価格を P_0 の水準から $\hat{P}_0$ の水準へと低下させるとき、その当初の地代

$$R_n^a = \sum_{i=1}^{n-1} \left(S_i + \alpha - \frac{S_n + \alpha}{C_n} C_i \right)$$

の余剰部分 $S_i + \alpha$ は、穀物価格の低下の直接的效果のみを見れば、減少することになる。その利潤部分の一部を構成する第 n 区画の余剰 $S_n + \alpha$ もその例外ではないが、われわれはすでに、この過程の出発点 t_0 において、穀物の価格が P_0 から $\hat{P}_0$ に低下したとき、諸資本の競争の結果として平準化した資本の一般利潤率が改良以前の水準 S_n/C_n よりは高いが、改良当初に異例の高さを示す農業ストックの利潤率 $(S_n + \alpha)/C_n$ の水準よりは低くなっていることを知っている。そうして、利潤部分の最後の構成要素である第 i 区画に投下されている資本 C_i は、穀物価格の低下によって増大するのであった。こうして、利潤率と資本の積である利潤部分は利潤率の低下率が資本の増加率を圧倒するか否かによって、減少あるいは増加するであろう。もしも利潤部分が増加するならば、余剰部分と利潤部分の差として定義される地代は必ず減少するであろう。しかしながら、穀物価格の低下が関数 f_i および g_i に及ぼす効果から、そのような帰結を確定的に導き出すことは困難である。

それゆえ、時点 t_0 において、穀物の価格が P_0 から $\hat{P}_0$ に低下するとき、地代が R_n^a から

$$\hat{R}_n^a = \sum_{i=1}^{n-1} \left\{ g_i(\hat{P}_0; \alpha) - \frac{g_n(\hat{P}_0; \alpha)}{f_n(\hat{P}_0; \alpha)} f_i(\hat{P}_0; \alpha) \right\}$$

へと低下したのか否かは、以上の議論からは結

論することはできない。そこで、われわれは上述のリカードの推測、すなわち、農業の改良は利潤を増大させるだけであるという推測を尊重して、地代は変化しないものと、すなわち、

$$R_n^0 = \hat{R}_n^a$$

であると仮定することにしよう。すなわち、穀物の価格が P_0 から $\hat{P}_0$ に低下するとき、地代が改良以前の水準 R_n^0 まで低下するものと仮定するわけである。このような仮定は、われわれの諸関数 f_i および g_i に次のような条件を課することを意味する。すなわち、

$$\begin{aligned} g_i(P_0; 0) - \frac{g_n(P_0; 0)}{f_n(P_0; 0)} f_i(P_0; 0) \\ = g_i(\hat{P}_0; \alpha) - \frac{g_n(\hat{P}_0; \alpha)}{f_n(\hat{P}_0; \alpha)} f_i(\hat{P}_0; \alpha). \end{aligned}$$

あるいは、

$$\begin{aligned} g_i(\hat{P}_0; \alpha) - g_i(P_0; 0) \\ = - \frac{g_n(\hat{P}_0; \alpha)}{f_n(\hat{P}_0; \alpha)} f_i(\hat{P}_0; \alpha) \\ - \frac{g_n(P_0; 0)}{f_n(P_0; 0)} f_i(P_0; 0). \end{aligned}$$

ここで、

$$\begin{aligned} \Delta g_i &= g_i(\hat{P}_0; \alpha) - g_i(P_0; 0) \\ \Delta f_i &= f_i(\hat{P}_0; \alpha) - f_i(P_0; 0) \\ \Delta \pi &= \frac{g_n(\hat{P}_0; \alpha)}{f_n(\hat{P}_0; \alpha)} - \frac{g_n(P_0; 0)}{f_n(P_0; 0)} \end{aligned}$$

と定義すると、上の等式は

$$\Delta g_i = \frac{g_n(\hat{P}_0; \alpha)}{f_n(\hat{P}_0; \alpha)} \Delta f_n + f_i(P_0; 0) \Delta \pi$$

に等しい。こうして、農業の改良の結果として各区画の余剰が α だけ増加するとき、穀物の価格が P_0 から $\hat{P}_0$ に低下するという条件のもとで、諸資本の競争が利潤率の平準化を達成し、しかも、その結果として地代は改良以前の水準にとどまるというリカードの推測を許容するために、資本、余剰、および利潤率の変化分すなわち、 Δf_i 、 Δg_i 、および $\Delta \pi$ の間に成立しなくてはならない関係が上掲の方程式で与えられるわけである。

以上の議論の順序を逆に迎れば、次のようになるであろう。各区画における資本と余剰の価

値をあらわす、われわれの関数 f_i および g_i が上の条件を満たすならば、時点 t_0 において農業の改良の効果が穀物価格の P_0 から $\hat{P}_0$ への低下として顕われるとき、地代は改良以前と同じ水準にとどまるというリカードの推測が実現する。なぜなら、上掲の等式の第2番目の表現形式について、すべての区画にわたる集計を行なえば、

$$\begin{aligned} & \sum_{i=1}^n g_i(\hat{P}_0; \alpha) - \sum_{i=1}^n g_i(P_0; 0) \\ &= \frac{g_n(\hat{P}_0; \alpha)}{f_n(\hat{P}_0; \alpha)} \sum_{i=1}^n f_i \hat{P}_i(\alpha) \\ & \quad - \frac{g_n(P_0; 0)}{f_n(P_0; 0)} \sum_{i=1}^n f_i(P_0; 0) \end{aligned}$$

であり、その左辺は時点 t_0 において改良の効果が穀物価格を $\hat{P}_0$ に低下させたときの余剰の集計量と改良以前における余剰の集計量との差であるのに対して、その右辺はこれら二つの状態における利潤総額の差であって、上の等式は二つの差が等しいことを示すからである。すなわち、改良以前の状態から、改良後、穀物価格が $\hat{P}_0$ まで低下したときに諸資本の競争の効果が出尽くした状態に達する過程で生じた余剰の増加分は、すべて利潤総額の増加分として吸収されて、地代が増加することはないわけである。なお、この余剰の増加分は、 P_0 よりも低い水準 $\hat{P}_0$ にある穀物価格のもとでのものであるから、 P_0 の水準のもとで評価される余剰の増加分 αn よりも小さいであろう。すなわち、記号で表現すると、

$$\begin{aligned} & \sum_{i=1}^n g_i(\hat{P}_0; \alpha) - \sum_{i=1}^n g_i(P_0; 0) \\ & < \sum_{i=1}^n g_i(P_0; \alpha) - \sum_{i=1}^n g_i(P_0; 0) \\ &= \sum_{i=1}^n (S_i + \alpha) - \sum_{i=1}^n S_i \\ &= \alpha n \end{aligned}$$

が成立する。しかし、時点 t_0 における調整がいちおう完了した状態において、農業者の手に入る余剰増加分が、調整前の P_0 のもとにおける余剰増加分よりも減少する原因は、穀物価

格が P_0 から $\hat{P}_0$ へと低下したことの直接的影響だけにあるのではない。それだけでは農業ストックの利潤率はなお、資本の一般利潤率よりも高く、その利潤率のもとで農業者の受け取る余剰増加分はその分だけ大きいはずだからである。農業ストックの利潤率が資本の一般利潤率と平準化して、 $g_n(\hat{P}_0; \alpha)/f_n(\hat{P}_0; \alpha)$ の水準に落ち着くには、諸資本の競争が十分に行なわれなければならない、そうして、この競争を通じて余剰増加分の一部分が農業者の手から、製造業者や商人の手へと移転するのである。こうして、われわれの過程の出発点 t_0 において、すでに、農業の改良の帰結として生じる余剰の増加分の一部分が、農業以外の諸部門に流出しているわけである。

ところで、われわれはすでに、われわれの過程の終着点 t_2 において、穀物価格の水準 P_0 のもとに評価される余剰の増加分 αn の全額が、農業以外の部門に流出してしまうことを知っている。それゆえ、時間 t が時点 t_0 から t_2 へと経過する過程で、 t_0 において農業者の手に入っていた余剰の増加分

$$\sum_{i=1}^n g_i(\hat{P}_0; \alpha) - \sum_{i=1}^n g_i(P_0; 0)$$

が、その他の諸部門の利潤として流出するのである。そうして、その流出が $\hat{P}_0 \rightarrow P_1 \rightarrow P_0$ という穀物価格の振動と、それに伴う利潤率の振動を媒介として行なわれるのであり、また、これらの振動の原因の一つに人口増加率の一時的な高まりがあることは、すでに述べたところから、容易に推察できるのであるが、以下、この点にもう少し立ち入ってみよう。

われわれの想定したところによると、時間 t が時点 t_0 から時点 t_1 に向けて経過するのに比例して、穀物の価格 P_t は $\hat{P}_0$ の水準から最低水準 P_1 に向けて一直線に低下するのであった。そうして、この局面を通じて、資本の一般利潤率は $g_n(\hat{P}_0; \alpha)/f_n(\hat{P}_0; \alpha)$ の水準から $g_n(P_1; \alpha)/f_n(P_1; \alpha)$ の水準へと上昇を続けるのであった。この間の地代の動きは次の方程式

で表わすことができる。すなわち、

$$R_n^a(t) = \sum_{i=1}^{n-1} \left\{ g_i(P_i; \alpha) - \frac{g_n(P_i; \alpha)}{f_n(P_i; \alpha)} f_i(P_i; \alpha) \right\}$$

一見したところ、この表現を利用して、諸関数 f_i および g_i の性質から地代の動きを演繹することが容易にできるかのように思われるかもしれない。たとえば、人は次のように考えるかもしれない。まず、穀物価格の低下は、その直接的効果として、各区画の余剰 $g_i(P_i; \alpha)$ を低下させるであろう。他方で、それは各区画で雇用されている資本の価値 $f_i(P_i; \alpha)$ を増大させるであろうが、この局面では利潤率 $g_n(P_i; \alpha)/f_n(P_i; \alpha)$ が上昇することは既知であるから、各区画における利潤額は増加する。こうして、余剰と利潤額の差として定義される地代は、すべての区画において低下するから、この前半局面 ($t_0 \rightarrow t_1$) を通じて、地代 $R_n^a(t)$ は低下し続ける。

しかし、ここで穀物価格の低下が余剰を減少させ、また資本を増加させるというのは、穀物価格の変化の直接的効果についてのみ言えることであるのに対して、利潤率の上昇は諸資本の競争の効果が出尽くしたあとの結果である。それらの諸効果は、同じ次元のものとして総合することのできないものである。じっさい、穀物価格の低下の直接的効果のみについて言うなら、それは第 n 区画の余剰を減少させ、その区画の資本を増加させるから、農業ストックの利潤率は低下するのではなくてはならない。しかし、われわれの議論では、それぞれの時点における穀物価格の水準のもとで諸資本の競争の効果が出尽くした結果に焦点が合わされ、その状態における資本と余剰の価値を関数 f_i および g_i で表現しているのである。

こうして、われわれの議論は別の方角から進められなければならない。リカードの議論によれば、時間 t が時点 t_0 から t_1 に向かって経過するにつれて利潤率が高まると、それはやが

て資本一般の蓄積を助長し、人口の増加を刺激するのであった。われわれの想定のもとでは、この過程を通じて耕作の限界が第 n 区画から先へと拡張することはないから、このようにして蓄積される資本と増加する労働力は、すべて農業以外の諸部門で雇用されるのではなくてはならない。それゆえ、これらの労働に対する賃金支払いの準備としての流動資本、すなわち、賃金基金が、これらの諸部門において蓄積されなければならない。それに見合うものとして、農業の改良の帰結として生じた余剰の一部分が農業からその他の諸部門に流出しなくてはならないのである。こうして、時点 t_0 において農業者の手中に残されていた余剰の増加分

$$\sum_{i=1}^n g_i(\hat{P}_0; \alpha) - \sum_{i=1}^n g_i(P_0; 0)$$

がその他の諸部門に流出して行く速度は、人口増加率の上昇によって加速され、そしてその低下によって減速されるであろう。いまかりに、この前半局面の進行にもかかわらず、資本一般の蓄積と人口の増加が従前通りに保たれるとしたならば、この余剰の流出速度は一定に保たれて、穀物価格の低下と諸資本の競争がもたらす事態は、時点 t_0 における調整の帰結と同様なものになるであろう。すなわち、リカードの主張するように、余剰の増減はすべて利潤の増減として顕われ、地代はその影響を受けないと想定することができるであろう。しかし、時間 t が時点 t_1 に向かって進むにつれて、やがて資本一般の蓄積率と人口の増加率が上昇を始める時点に達する。そのとき、農業からその他の諸部門へと余剰が流出する速度が加速され、その意味で農業者の手中にある利潤を減少させる力がはたらくことになる。けれども他方で、諸資本の競争は農業ストックの利潤率をその他の諸部門で雇用される資本の利潤率と同じ高さに保つ作用を有するから、農業利潤は減少することができない。このような事態のしわ寄せは、結局、地代に及んで、地代が一時的に減少することになる。換言すれば、資本一般の蓄積率

と人口の増加率における与件の変動は、余剰の変化が地代に影響を及ぼさないというリカードの原則的想定を修正させることになるのである。

こうして、前半局面の終着点、すなわち、後半局面の出発点である時点 t_1 において、地代総額 $R_n^a(t_1)$ は、時点 t_0 における地代総額 $R_n^a(t_0) = R_n^0$ よりも減少しているであろう。ここで、後半局面 ($t_1 \rightarrow t_2$) における地代総額の時間経路を次の方程式で表わすことにしよう。すなわち、

$$R_n^a(t) = \sum_{i=1}^{n-1} \left\{ G_i(P_i; \alpha) - \frac{G_n(P_i; \alpha)}{F_n(P_i; \alpha)} F_i(P_i; \alpha) \right\}$$

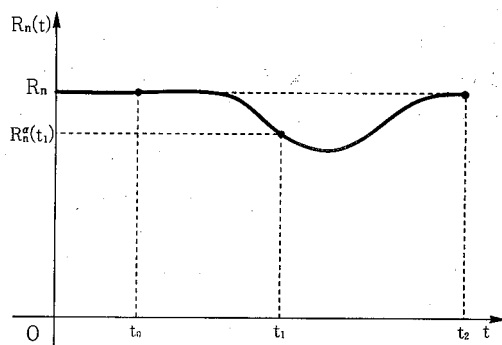
時間 t が t_1 から t_2 へと経過するとき、それに比例して、穀物価格 P_i は最低水準 P_1 から改良以前の水準 P_0 へと回復する。そのとき、諸資本の競争の帰結として定まる各区画の資本と余剰の価値を、それぞれ、関数 F_i と G_i で表現すると、上掲の方程式が成り立つのである。とりわけ、時点 t_1 では次の関係が成立する。すなわち、

$$\begin{aligned} R_n^a(t_1) &= \sum_{i=1}^{n-1} \left\{ G_i(P_i; \alpha) - \frac{G_n(P_i; \alpha)}{F_n(P_i; \alpha)} F_i(P_i; \alpha) \right\} \\ &= \sum_{i=1}^{n-1} \left\{ g_i(P_1; \alpha) - \frac{g_n(P_1; \alpha)}{f_n(P_1; \alpha)} f_i(P_1; \alpha) \right\} < R_n^0 \end{aligned}$$

ところで、時間 t が時点 t_1 を過ぎても、しばらくは、人口の異例の増加は続くであろうから、農業部門から余剰の流出する速度はなお高まり、地代は減少を続けるであろう。しかし、やがて、穀物価格の上昇が利潤率の低下を経由して、資本一般の蓄積と人口の増加にブレーキをかけるときがくると、農業部門から余剰の流出する速度は低下して、地代はしだいに時点 t_0 における水準へと回復するであろう。

以上の議論の結果は、第3図のようなグラフ

にまとめることができる。その横軸には時間 t が、そして縦軸には地代総額 $R_n^a(t)$ の値がと



第3図

られている。時間が t_0 から経過しても、しばらくの間は、農業の改良の帰結としての余剰の変化は地代に影響を及ぼさないというリカードの想定がそのまま維持されて、地代は当初の水準 R_n^0 にとどまる。しかし、その間の利潤率の高まりが人口の増加を刺激する効果が顕われると、リカードの想定は修正されて、地代は低下を始める。穀物価格が低下する前半局面が時点 t_1 で終わっても、しばらくは、人口増加の異例の高まりが残存するので、地代はなおも低下を続ける。しかし、穀物価格が上昇傾向に転じる後半局面が進むにつれて、人口増加はもとの趨勢に戻り、地代は当初の水準 R_n^0 に復帰して、リカードの想定が再び成立する。しかし、ここでは、出発点 t_0 で農業者の利潤として吸収されていた余剰の増加分が、その他の諸部門の利潤として吸収され、それらの部門における労働の雇用の増大を通じて、異例の増加率のもとに増加した人口の部分維持することになるのである。

XX

前節でわれわれは、リカードのパラグラフ (32) の前半における彼の「価値の理論」の表明に、とりわけ、「穀物の生産における容易さ

が……その交換価値を低下させる」という文章に付せられた脚注*で述べられている命題を検討したのである。その命題は、彼の「価値の理論」に沿って、農業の改良が穀物価格の低下を惹き起こすことを願慮する場合に、「農業の改良は利潤を増大させ、そうして、地代を一時的に低下させる」と主張する。それは、すなわち、農業の改良が地代を増加させるというマルサスの主張に対して、リカードがパラグラフ(10)の脚注*で、増大するのは利潤だけであるように思われるとコメントしたことに加えて、さらに、地代は一時的に低下することさえあると、たたみかけているのである。リカードの価値の理論を出発点として、それ以後に行なわれた諸論議の脈絡になじんだ者の目には、価値の理論の表明に付された脚注の議論が、資本の蓄積過程における改良の効果の分析であることは、ある意味で唐突に映るかもしれないけれども、それは後代の論議のほうがリカードの議論の文脈から乖離したためであって、リカード自身が価値の理論を彼の体系の中に位置づけていた本来の文脈が、資本蓄積と人口増加が平行的に進行する過程における分配理論であることは動かし難い事実であると言わなくてはならない。そういうわけで、改良の効果の分析がつねに彼の念頭にあったのはきわめて自然なことなのである。じっさい、彼のパラグラフ(32)の本文の議論も、こう続けられている。

「……こうして次のことがわかる。すなわち、農業における、あるいは、耕作機具における改良は穀物の交換価値を低下させ[†]、そうして木綿製品の製造に関係する機械の改良は木綿製品の交換価値を低下させ、そしてまた、鉱業における改良、あるいは、新しく、より豊かな貴金属の鉱脈の発見は金と銀の価値を低下させる、あるいは、同じことになるが、その他のあらゆる商品の価格を騰貴させることがわかる。」³⁴⁾

リカードは価値の理論を述べるにあたって

用いた「生産の容易さ」(facilities in the production)という概念を、ここでは生産における「改良」(improvements)という概念に具体化し、そうして、それを農業のみならず、製造業や鉱業の場合に敷衍して、いずれの場合にも、それがそれぞれの生産物の価格を低下させると述べている。しかしながら、農業以外の場合について、生産における改良が所得の分配にどのような効果を及ぼすとリカードが考えているかは、この段階ではまだ明らかではない。とりわけ、製造業における機械の導入の効果の分析は、リカードの著作活動のもっと後の局面における課題となるのである。しかし、農業の場合には彼が明確な枠組をすでに有していたことが、われわれのこれまでの議論からも、明らかであろう。加えて彼は、上掲の一節の中の農業における改良にかんする文章に付した脚注[†]で、彼の経験的観測をこう述べるのである。

「[†]穀物の追加量の調達をよりいっそう困難にする諸原因は、進歩しつつある国では、絶えず作用しているのであるが、他方において、農業の、あるいは、耕作機具の顕著な改良は、それほど頻繁に起こるものではない。もしもこれらの対立的に作用する諸原因が相殺的な効果を有するとしたならば、穀物は、気候の不順から、労働の実質賃金の増減から、あるいは、貴金属の過不足によって生じるその価値の変動から起こる偶発的な価格の変動だけを蒙ることになるであろうが。」³⁵⁾

すなわち、リカードは、進歩しつつある国、とりわけイギリスでは、穀物生産の困難さが傾向的に増大し、したがって、国内産穀物の交換価値は傾向的に上昇するであろうと考えているのである。

XXI

パラグラフ(32)の本文における議論の流れの中で、リカードは彼の「価値の理論」を別の

34) Ricardo, *op. cit.*, p. 19n, 上記 p. 82 (188).

35) *Ibid.*, p. 19.

文章でもう一度表明する。すでに触れたところであるが、その文章は彼の「価値の理論」の表明に焦点をしぼるとき、そのパラグラフのクライマックスを成すものである。すなわち、

「競争がその効果を十全に発揮することができて、その商品の生産が、ワインの場合のように自然によって限定されるといったようなことがないところではどこであれ、それらの生産が困難であるか、あるいは容易であるかが、それらの交換価値を窮極において規制するであろう**」³⁶⁾ というのがそれであった。そうして、その末尾の脚注**で彼はこう述べるのである。

「**あらゆる商品の価格は、ストックの一般利潤を含むそれらの生産費によって、窮極的に規制されるとともに、また、つねにそれに向かう傾向があるけれども、それらのすべては、そうして、おそらく、それらのたいていのものより以上に穀物は、一時的な原因から生じる偶然的価格 (an accidental price) に左右されるのである。」³⁷⁾

このように、彼は本文において述べた「価値の理論」に留保条件を付けているのであるが、そうすることによって、「それらの生産が困難であるか、あるいは、容易であるかが、それらの交換価値を窮極において規制する (to regulate)」という表現に彼が託している意味内容を明らかにしているのである。

すなわち、彼が「規制する」という言葉を使用するとき、それはきわめて抽象度の高い理論上の関係を表現する。諸々の偶然的要素をすべて捨象したうえで、彼の理論に照らして必然的と認められる関係が、この言葉によって表現されているのである。現実³⁸⁾に成立する価格は、つねに偶然的要素によって左右されるから、それは偶然的価格にほかならない。とりわけ、穀物の取引においては、彼の「価値の理論」によって必然的とは認め難い、多数の偶然的要素がその価格の形成にかかわっていることを、彼はは

っきりと認識しているのである。

ちなみに、この脚注の文章におけるリカードの用語法は、彼とマルサスとの間に認められる共通部分の一端を示唆して興味深い。マルサスが、その『地代の研究』のパラグラフ (5) において³⁸⁾、地代の定義を与えたときに、彼が「土地の耕作に関係するあらゆる支出」の中に、「当該期における農業ストックの通常利潤率で見積もられるところの……利潤」を含めていることは、リカードの「農業ストックの利潤の理論」における立場に対する基本的相違点であることを、われわれはすでに何度か繰り返し強調してきた。リカードは農業ストックの利潤を、地代とともに、余剰として扱っているのであった。しかしながら、この脚注の文章では、あらゆる商品の生産費の中にストックの一般利潤を含めるというマルサスと類似の取り扱いが見られるのである。そこで、次のように言うことができるであろう。すなわち、リカードは「農業ストックの利潤率をめぐる考察」において、その利潤率の決定を論じるときには、農業ストックの利潤を余剰の範疇に属させるのであるが、次に議論が「資本の一般利潤率をめぐる考察」に移ると、そうして、とりわけ、穀物も含めて諸商品の価格を論じるときには、それらの生産に雇用される資本の利潤を生産費の中に含めるというマルサスと類似の方法を採用するのである。

そのとき、リカードにとって「ストックの一般利潤」(the general profits of stock) とは、彼の理論的観点から必然的なものとして説明される理論上の概念でなくてはならない。なぜなら、彼によれば、それを³⁹⁾含む生産費によって、商品の価格が規制されるからである。これに対して、マルサスの「当該期における農業ストックの通常利潤率で見積もられるところの……利潤」(the profits estimated according to the usual and ordinary rate of the profits of agricultural stock at the

36) *Ibid.*, pp. 19-20.

37) *Ibid.*, p. 20n.

38) Malthus, *op. cit.*, p. 1.

time being) をリカードのものと抽象度を同じくする理論的概念と看做すことはできない。マルサスのそれは、リカードのものよりも、はるかに経験的な色彩を強く帯びている。マルサスの議論とリカードのそれとの間に見られるこのように顕著な抽象度の相違は、われわれにケインズの例の評言を想起させる。ケインズの言葉は、マルサスのパンフレット『食糧の高価格』(1800年刊)³⁹⁾について、しかも、『有効需要』の概念に焦点を合わせて、述べられたものであるが、われわれの当面の問題の理解にも有益であると考えられるので、すでに一度引用したのではあるが、ここで再度引用してみたい。ケインズはこう述べたのである。

「このパンフレットは、それ自体としても、また、マルサスが後年リカードとの文通の中で展開することになる実際の経済問題への一定の接近法にすでに傾いていたことを示すものとしても重要性を有する。——その接近法は私には非常に共感の持てるもので、また、それに対立するリカードの接近法よりも、正しい結論に導く見込みの高いものである。しかし、勝利を得たのはリカードのより魅惑的な知的構築物と、そしてリカードその人であった。マルサスの考えに対して完全に背を向けることによって、100年もの間、経済学を作為的な慣行の型の中に閉じ込めたのである。

マルサスの良き常識に基づく考え方によれば、価格と利潤は、けっして明確にはないけれども、彼が『有効需要』という言葉で表わしたところのものによって、主として決定される。リカードはそれよりもはるかに厳密な接近方法を好んだ。彼は『有効需要』の背後の、一

方における貨幣と、他方における生産物の実質的費用と実物的分配との根底的諸条件にまで立ち至り、そうして、これらの基本的要因がそれぞれに固有な一定した仕方でも自動的に作用するものと考えて、マルサスの方法をきわめて皮相なものとしたのである。しかし、リカードは彼の高度に抽象的な議論の数多くある一連の段階を単純化する過程で、必然的に、そして、彼自身が意識した以上に、現実の事実から遊離することになった。他方、マルサスはその議論を結論にはるかに近いところから始めることによって、実際の世界で起こると予想されるところのものを、よりの確に捉えたのである。⁴⁰⁾

ケインズの言う「マルサスが後年リカードとの文通の中で展開することになる実際の経済問題への一定の接近法」なるものは、それが1815年の穀物法問題にかんするものである限りにおいて、マルサスの『地代の研究』の中に集約されていることは、これまでわれわれが紹介してきたところから明らかである⁴¹⁾。とすれば、ケインズの言う「リカードのより魅惑的な知的構築物」とは、まず、何よりもリカードの『利潤にかんするエッセイ』に述べられてある理論でなくてはならない。じっさい、われわれはまだその理論の検討の途中に立ち止まっているのではあるけれども、これまで見てきたところからだけでも、それが「知的構築物」の名に値するものであると感じ取ることができる。

こうして、1815年の穀物法問題に照らして、マルサスの『地代の研究』とリカードの『利潤にかんするエッセイ』とを比較するとき、ケイ

39) *An Investigation of the Cause of the Present High Price of Provisions: Containing an Illustration of the Nature and Limits of Fair Price in Time of Scarcity; and its Application to the Particular Circumstances of this Country*, by the Author of *The Essay on the Principle of Population* (London: J. Johnson, 1800).

40) John Maynard Keynes, *Essays in Biography*, the new edition (London: Rupert Hart-Davis, 1951), pp. 102-103 拙稿「賃金基金の系譜について(4)」, 本誌第35巻第1号(1985年6月), p. 168 (168).

41) 拙稿「賃金基金説の系譜について(3)」の第Ⅳ節以下(本誌第34巻第3号, pp. 162 (442)-173 (453)), 「同上(4)」(本誌第35巻第1号, pp. 160 (160)-175 (175)), および、「同上(5)」の第Ⅱ節(本誌第35巻第2号, pp. 151 (327)-160 (336)) 参照。

ンズは後者の高度に抽象的な議論が現実の事実から遊離することに強い危惧の念を抱き、前者の「実際の世界で起こると予想されるところのものを、よりの確に捉え」る議論に共感を覚えたわけである。しかし、ケインズとは異なる感じ方をした人物がいたことも事実である。すでに、われわれが触れたことがあり、そうして、これからさらに詳細に紹介することになるジェイムズ・ミルがその人である。彼がその交際の当初からリカードのひととなり強く惹かれていたという事実は、すでにわれわれの知るところである。そうして、彼がリカードの「知的構築物」に魅惑されて、それを本格的な著書の形態に完成させるために精神的援助の手をさし伸べるいきさつは、やがてわれわれの取り上げて論じるところとなるであろう。こうして、マルサスの接近法に対するケインズの共感にもかかわらず、「しかし、勝利を得たのはリカードのより魅惑的な知的構築物と、そしてリカードその人であった」とケインズが述べる時、その文章の行間にはジェイムズ・ミルという人物の介在が読み取られなくてはならないのである。

ところで、リカードが、一見したところマルサスのそれと類似しながら、なお微妙な相違を示す生産費の概念を採り、そうして、それによって商品の価格が規制されると述べる時、余剰としての地代はどのようなのであるのか。この点について、一つの見解がマルサスによって明示されており、リカードもそれには同意するように思われるから、それを見ることにしよう。マルサスは『地代の研究』のパラグラフ(5)で地代の定義を与えた後に、こう述べているのであった。

「(6) 偶然のかつ一時的な事情から、その農業者はこのような額よりも多く、あるいは少く、地代を払うということが時として起こる。しかし、この額は、現実には支払われる地代が絶えずその方向に引き付けられて行く点であり、そうして、それゆえに、地代という用語が一般的な意味で用いられるときにはいつでも意味さ

れているところのものである。

(7) 地代の直接的な原因は、明らかに、原生産物が市場で売られているところで、その生産費を越える価格の余剰である。」⁴²⁾

穀物も含めてあらゆる商品が偶然的価格にではなく、リカードの「価値の理論」に沿う自然的価格に左右される状態を考えるならば、原生産物の余剰は、彼の「利潤の理論」の示すように、利潤と地代とに分けられるであろう。そのとき耕作の限界をなす土地の区画において、マルサスの意味での余剰はゼロであるが、リカードの意味でのそれは、その区画で雇用されている農業ストックの利潤として農業家の投資意欲を支えているわけである。そうして、この利潤は諸資本の競争の帰結として、資本の一般利潤と同じ額になっているから、リカードがそれを生産費に含める便法を採るとき、限界地における穀物の生産費はその自然価格に等しくなくてはならない。しかし、限界地よりも肥沃であるか、あるいは立地条件のよい限界内地については、自然価格の支配する状態においても、地代を支払うに十分な余剰が生み出されているのである。換言すれば、限界内地における穀物生産は、そのような余剰に対応する幅をもって、穀物の価格と生産量とを乖離させるのである。マルサスの『地代の研究』の理論上の目的は、地代を、独占にもとづく一時的利得としてではなく、自然的価格の支配する状態でも存在しうる自然的概念として説明することにあつたのであり、リカードの『利潤にかんするエッセイ』もこの点については軌を一にするものである。

しかし、穀物が偶然的価格によって左右される状態を考えるときには、地代も、もはやこのような自然的概念ではありえない。とりわけ、限界内地について言えば、農業者はマルサスあるいはリカードの理論によって決定されるところの「このような額よりも多く、あるいは少

42) Malthus, *An Inquiry into the Nature and Progress of Rent*, pp. 1-2, および本誌第35巻第2号, p. 153 (329)。

く、地代を支払うということが時として起こる」のである。この意味において、穀物が市場で売られる価格が生産費を越えるところの余剰はマルサスの言うように「地代の直接的な原因」になるのである。

しかし、リカードの興味は偶然的価格の支配する状態には向けられない。彼はその「魅惑的な知的構築物」を、彼の価値の理論が支配するという大前提の上に築き上げているのである。もちろん、そのことは彼の簡明にして巧妙な数値例を示す表式のように、穀物の価格を不変とする仮定を必要とはしない。たとえば、農業の改良によって穀物の価格が低下する局面も彼の視野に入っていることは、すでに本稿で検討したところからも明らかである。こうして、リカードが脚注**において述べている「あらゆる商品の価格は、ストックの一般利潤を含むそれらの生産費によって、窮極的に規制される」という命題を穀物に適用するときには、その「生産費」とは限界地における耕作の費用であると理解されなくてはならないであろう。

XXII

リカードはパラグラフ (32) で、彼の価値の理論の命題を繰り返し提示したあとで、このパラグラフを次のように締めくくっている。

「そうして、農業におけるか、あるいは製造業における、あらゆる改良とは独立に、富の増進が単独で諸価格に及ぼす効果は、その他のすべての商品の価格を従前のままにとどめながら¹、原生産物および労働の価格を上昇させるとともに、賃金の全般的上昇の帰結として、一般利潤を低下させることであるように思われる。」⁴³⁾ (傍点筆者)

この命題は「富の増進が……原生産物および労働の価格を上昇させる」過程で一般利潤率が低下する傾向を述べているが、それはパラグラフ (30) で述べられた「わが国の富と人口が増

大する過程において、もしも穀物の貨幣価格と、そして労働の賃金が少しも変化しなかったとしても、なお利潤は低下し」という農業ストックの利潤率の低下傾向にかんする命題における単純化のための条件を経験的な事実に合うように緩和して、一般利潤率の低下傾向へと議論を拡張したものになっている。そこには、原生産物と労働の価格の上昇が経済全般にわたる賃金の一般的上昇を招来し、その結果、農業ストックの利潤率のみならず、全部門で雇用される資本の一般利潤率を低下させるという新しいメカニズムが付加されてある。しかし、リカードがこの命題を提示するにあたって、原生産物以外の「すべての商品の価格を従前のままにとどめながら」という条件を置いていることに注目しよう。この条件節には、『リカード全集』の編者の注1が付けられているので、それを見ることにしよう。

「¹ 刊行後間もなく、リカードはこの点にかんする彼の意見を修正し、そうして、その他の諸商品の価格が『あらゆる製造業製品の原材料の価値の変化』によって変化することを顧慮するようになったのである。マルサス宛、1815年3月9日付の書簡、本全集第6巻179ページを見る。また、『原理』、本全集第1巻117ページを参照せよ。」⁴⁴⁾

そこで、編者の指示するマルサス宛1815年3月9日付のリカードの書簡を見ることにしよう。編者の推定によれば、リカードの『利潤にかんするエッセイ』が公刊されたのは1815年2月24日のことであった。そうして、その直前までの両者の交信は、すでにわれわれの検討したところである。その時期にとり交わされた最後の書簡は、マルサスからの2月12日付のものと、それに対するリカードの2月13日付の返信であった⁴⁵⁾。『リカード全集』第Ⅵ巻に収録さ

44) *Ibid.*, p. 20n.

45) 拙稿「賃金基金説の系譜について(4)」、本誌第35巻第1号, pp. 163 (163)-164 (164), および pp. 174 (174)-175 (175)。

43) Ricardo, *op. cit.*, p. 20, および本稿, p. 82(188)。

れている書簡を見ると、その後、3月9日までの約3週間半にわたって、両者の間に書簡のやりとりはなかったかのように見受けられる。その前後の時期の両者の交信の頻繁さに照らして、その空白はやゝ異例に属するかに思われるが、ともかくも、リカードの『利潤にかんするエッセイ』の発刊日は、この空白期に位置するのである。そうして、この空白を破る最初の書簡が上掲の編者の注1によって指示されているリカードの書簡なのである。そこでリカードはこう書いている。

「1815年3月9日 ロンドンにて

拝啓

私の交友関係は経済学者のなかにはきわめてわずかしきありませんので、あなたが私の独特の意見であるとお考になっておられます点を、誰か支持する人がいるか否か、あるいは、じっさいに、それらの意見が読まれているのか、または、注目されているのかどうかを、私が知ることのできる機会は非常に少ないのです。この問題にかんする私自身の判断はといえば、ご注目賜わるには、おそらく、あまりに偏ったものではありませんが、ともかくも、私自身の意見に対して好意的な側に偏らないよう最善の努力を尽くしたうえで、私はそれらが正しいと考え続けております。

一方で富（の増進）から、あるいは、他方で諸外国からの輸入、もしくは農業における改良の、いずれから生じるものであれ、穀物価格のあらゆる変動のもとで、諸商品の価格が静止しているという状態につきまして、私が述べてしまったところを修正することができればと思っております。製造業のあらゆる製品の原材料の価値の変化を、私はまったく顧慮しておりませんでした。思考いたしますに、それらは価格の変動を蒙るものと思われます。そうして、それは賃金の増減によるのではなくて、それらの成分として含まれる原生産物の価格が騰落することによって起こるのですが、一部の商品の場合

には無視することのできないものです。//私の著述の出来上りがこのように不完全なものになってしまったことは、私には屈辱です。私は性急過ぎました。そうして、これらの問題の表面をなぞるだけの人々は言うに及ばず、このような論題に慣れている人々にさえも、私の考えをわかるように述べてはいなかったのです。

あなたにお逢いた後に、私はエドワード・ウェスト氏から論文を贈られました。氏は、ユニヴァーシティ・カレッジのフェローという肩書だけを付してあるその論文の執筆者なのです。彼が私の意見に好意的に書いているのは、もちろん、私の意見が彼自身のものに非常によく似ているからです。私は彼の書物を注意深く読みました。そうして、彼の見解が私自身のものに非常に一致していることを知りました。彼は法廷弁護士で、齢若く、そうして、経済学をたいへん好んでいるようです。ブラム氏があなたに彼を紹介する旨約束なさっているとのことであると、私は受け取っております。//ジェイコブ氏は彼と私の両方をかなり手ひどく扱っていますが、しかし、氏はわれわれと討論する気はないでしょう。もしも私を攻撃することになる最も手強い論敵が氏であるとするならば、私にはきわめてたやすいことです。と言いますのは、氏が経済学の科学的な分野にまったく通じていないように思われるからです。⁴⁶⁾

本題に入る前に、横道にそれて、この書簡の原文のありようを少し見ておこう。当面のところ、この書簡の原本を直接に見ることのできない筆者のような者が利用することのできる資料は二つある。その一つがジェイムズ・ボナーの編集になる『マルサス宛リカード書簡集：1810年－1823年』所載のものであり、いま一つは、

46) この訳文は、筆者の好みによって、ボナーの編集した書簡集の原文に拠っている。James Bonar (ed.), *Letters of Ricardo to Malthus, 1810-1823* (Oxford: At the Clarendon Press, 1887), pp. 62-64. なお、スラッファ編『リカード全集』における収録箇所は次の通り。Ricardo, *Works*, Vol. VI, pp. 178-180.

もちろん、スラッファ編『リカード全集』第Ⅶ巻に収録されているものである。上掲の訳文は、ボナー版の原文と同じく、三つのパラグラフで構成されているが、スラッファ版では、その第2パラグラフと第3パラグラフの途中に、それぞれ挿入されている//印の所で、さらに別個のパラグラフが建てられている。われわれがボナー版の形式を採ったのは、そのほうが文脈の流れから自然であるという好みに従ったままであって、リカードの書簡の原本がそうになっているという事実を主張しているわけではない。そこまで主張するためには、何をおいても、リカードの書簡の原本を見る必要があるが、それさえあれば決着がつけられるかという、必ずしもそうならないであろうと思われる事情も予想されるのである。手書きの文章をどう読むかは、それを読む者がどのような解釈を有するかによって左右されることが、しばしばありうるからである。いずれにせよ、ボナー版とスラッファ版の原文には、パラグラフ構成のみならず、句読法にもかなり大きな相違が見られるので、そのありようを以下に示すことにしよう。次の英文中、[] でくくられている句読点、記号、あるいは文字はボナー版に固有のもの、() のものはスラッファ版に特有のもの、そうして、何も付せられていないものは両者に共通するものである。

London 9th March 1815

My dear Sir

My acquaintance lies so little amongst political economists that I have very few opportunities of knowing whether (,) what you consider as my peculiar opinions (,) have any supporters, or indeed whether they are read or attended to.⁽¹⁾ As for my own judgement on the subject, it is perhaps too partial to merit attention [;] (,) but after my best efforts not to be biased in favo[u]r of my own opinions [,] I

continue to think them correct.

I would indeed rather modify what I (have) said concerning the stationary state of the prices of commodities (,) under all variations of the price of corn, either from wealth on the one hand (,) or the importation from foreign countries (,) or improvements in agriculture (,) on the other. I made no allowance for the altered⁽²⁾ value of the raw material in all manufactured goods⁽¹⁾ [.] (;) [T] (t) they would [,] I think [,] be subject to a variation in price not on account of the rise or fall in the price of raw produce which enters into their composition [,] and which in some commodities cannot be inconsiderable.⁽³⁾ // It is a matter of mortification to me that my execution has been so faulty [;] (, —) I was too much in a hurry, and have not made my meaning intelligible even to those who are familiar with such subjects, much less to those who skim over these matters.

Since I have seen you I received a note from Mr. Edward West [,] who is the author writing under the title of a [F] (f) fellow of University College [;]⁽⁴⁾ (, —) he speaks in favo[u]r of my opinions (,) of course [,] (;) because they are very similar to his own. (—) I have read his book with attention [,] and I find that his views agree very much with my own. He is a barrister, (—) a young man and appears very fond of the study of political economy. Mr. Brougham has, I think he said, promised to introduce him to you. (—) // Mr. Jacob⁽²⁾ has handled both him and me rather roughly [;] (, —) but he will not condescend to argue with us.⁽¹⁾ I shall be very easy

if he is the most formidable opponent that is to attack me, for he seems totally ignorant of the scientific part of the subject.

これだけの相違点を見ると、『リカード全集』の編者の仕事がボナーのそれよりも後の時代になされた新しいものであるという事実に基づいて、リカードの書簡の原本の復原に前者のほうがより細心の注意を払っていると信じたいところであるが、編集上のこのような特性は編集者の個性に左右されることが多く、一般的に時代の進行とともに前進するとは思えない事例(『ケインズ全集』もその一つである)もあるうえに、すでに前稿に見たように、『リカード全集』の編者の見識に対するわれわれの信頼もけって全幅のものではありえないのである。われわれが十分な信頼を置いて、その収録資料を利用することができるためには、この『全集』に対する厳正な批評的研究の出現が待望されるところである。

さて、この原文に付けられているスラッファの注(1)は『利潤にかんするエッセイ』の発刊日を指示するものであり、また注(2)は“altered”という単語が後から挿入した形をとっている旨を記したもので、両者ともにボナー版にはない注記であるが、当面、われわれの興味を惹くものではない。われわれがここで問題にするところのものは、上掲原文の第2パラグラフの記述と、そうして、そこに付けられているボナーの注〔1〕とスラッファの注(3)である。まず最後のものはこうなっている。

「(3)『利潤にかんするエッセイ』本全集第Ⅳ巻20ページを見よ。また、『原理』本全集第Ⅰ巻117ページを参照せよ。リカードはこの書簡でウェストの意見を採用している(次の注に指示してあるウェストの『エッセイ』の38ページを見よ)。⁴⁷⁾

この注の最初の文章が指示しているものは、

われわれの議論の出発点であるリカードのパラグラフ(32)の最後の文章である。そこに付されてある編者の注1の指示に従って、われわれはリカードの上掲書簡を検討しているわけである。

次に、この注の第2の文章が指示しているところのものは、リカードの『経済学および課税の原理』の第Ⅶ章「利潤について」の中のあるパラグラフであるが、それはボナーの注〔1〕によって指示されているところのものと一致している。ボナーの注は『原理』のマカロック版⁴⁸⁾の65ページを指示していて、スラッファの指示するページとの間に大きな隔たりがあるかのように見えるけれども、それは19世紀中葉に出たマカロック版の活字が極端に小さいこと(おそらく、それは印刷技術の進歩の局面なのであろうが)から生じたものであって、両者の指示するパラグラフは同じものである。

スラッファの注(3)の第3の、すなわち、最後の文章は、彼独自の意見の開陳であり、これはボナー版には見られないものである。すなわち、リカードが上掲書簡の第2パラグラフにおいて、「それら(製造業のあらゆる製品)は価格の変動を蒙るものと思われます。そうして、それは賃金の増減によるのではなくて、それらの成分として含まれる原生産物の価格が騰落することによって起こるのですが、一部の商品の場合には無視することのできないものです」と述べているのは、エドワード・ウェストの『エッセイ』⁴⁹⁾の38ページにある意見を採っ

48) J. R. McCulloch (ed.), *The Works of David Ricardo with a Notice of the Life and Writings of the Author*, New Edition (London: John Murray, 1886).

49) *An Essay on the Application of Capital to Land, with Observations shewing the Impolicy of any Great Restriction of the Importation of Corn, and that the Bounty of 1688 did not lower the price of it*, 'By a Fellow of University College, Oxford' (London: Underwood, 1815), reprinted as *Sir Edward West on the Application of Capital to Land 1815*, edited by Jacob H. Hollander (Baltimore: The Johns Hopkins Press, 1903).

47) Ricardo, *ibid.*, p. 179n.

たものだと言うのである。

このスラッファの意見を検討するにあたって、まずリカードの書簡の第2パラグラフをよく見ておこう。それはこう始められていた。すなわち、

「一方で富（の増進）から、あるいは、他方で諸外国からの輸入、もしくは農業における改良の、いずれから生じるものであれ、穀物価格のあらゆる変動のもとで、諸商品の価格が静止しているという状態につきまして、私が述べてしまったところを修正することができればと思っています。製造業のあらゆる製品の原材料の価値の変化を、私はまったく顧慮しておりませんでした」⁵⁰⁾と彼は述べている。

この文章においてリカードが意味している箇所の一つが、パラグラフ（32）の最後の文章であることには疑いの余地はないであろう。しかし、その最後の文章には、「農業におけるか、あるいは製造業における、あらゆる改良とは独立に、富の増進が単独で諸価格に及ぼす効果」と明記されてあるので、それは「富（の増進）から……生じる穀物価格の……変動」について論じるときに、リカードが「製造業のあらゆる製品の原材料の価値の変化を……顧慮して」いないという一事例にすぎないのである。

しかしながら、リカードが残念に思っていることが、その場合だけでないことは、彼がマルサスに宛て書いた言葉から明らかである。すなわち、パラグラフ（32）の最後の文章の場合だけでなく、穀物価格の変動が諸外国からの輸入によって生じる場合と、また、農業における改良によって生じる場合にも、「製造業のあらゆる製品の原材料の価値の変化を、……顧慮して」いないことを、リカードは告白しているのである。しかし、諸外国からの輸入の場合は、まだわれわれの検討するところとなっていないので、すでに検討した農業における改良の場合を振り返って見ることにしよう。

それは、リカードのパラグラフ（32）の第3番目の文章と、その文章に付けられている彼の注*に述べられている命題に関係している。それらをここに再掲すると、次のようになる。

「(32) ……それとは反対に、穀物の、あるいは、その他のいかなる種類の商品の生産における容易さも同量の生産物をより少ない労働で生み出すことを可能にするであろうから、その交換価値を低下させることであろう*。……」⁵¹⁾

「* 農業の改良によって惹き起こされる穀物価格の低下は利潤を増大させ、そうして、蓄積を助長することによって、人口に刺戟を与えることであろうが、そのことは再び穀物の価格を上昇させ、そうして、利潤を低下させるであろう。……」⁵²⁾

これらの命題は、すでに本稿の第XIX節において相当に詳しく検討したところであるが、この文面には、一見したところ、パラグラフ（32）の最後の文章の中でスラッファの目に止まった「その他のすべての商品の価格を従前のままにとどめながら」という節に対応する陳述を見出すことができない。しかしながら、その点については、われわれはその前にある文章に遡ることによって、容易に了解することができるのである。すなわち、パラグラフ（32）の第3番目の文章のように「生産における容易さ」についてではなく、その「困難さ」について議論を展開している第2番目の文章はこうなっている。

「(32) ……そこで、もしも穀物の生産に新しい困難が起こるならば、金、銀、生地、リンネル製品、等を生産するために少しも多く労働が必要とされることはないのにたいして、穀物にはより多くの労働が必要になることから、穀物の交換価値は他の商品に比較して必然的に上昇するであろう。」⁵³⁾（傍点筆者）

ここで傍点を付した一節は、穀物以外のその

50) Ricardo, *Works*, Vol. VI, p. 179. 本稿, p. 107 (213).

51) Ricardo, *Works*, Vol. IV, p. 19, 本稿, p. 82 (188).

52) *Ibid.*, p. 19n. 本稿, p. 87 (193).

53) *Ibid.*, p. 19, 本稿, p. 82 (188).

他の諸商品、とりわけ製造業のあらゆる製品の生産に必要とされる労働量が不変のままに保たれることを意味し、そうして、リカードの議論の大きな流れに沿えば、そのことは「その他のすべての諸商品の価格を従前のままにとどめながら」という節に対応するものになっているのである。こうして、この傍点の一節が第2番目の文章に賦与しているニュアンスは、その次に来る第3番目の文章の中にまで余韻を引いて、その背後に追加的な内容をひそませるのである。第3番目の文章にかくされているその内容を言葉として明示するなら、それは次の文章の中で傍点を付されている一節のようになるであろう。すなわち、

「……それとは反対に、穀物の、あるいは、その他のいかなる種類の商品の生産における容易さも同量の生産物をより少ない労働で生み出すことを可能にするとともに、それ以外の諸商品を生産するために少しも少なく労働が必要とされることはないから、その交換価値を低下させるであろう」と。

こうして、「製造業のあらゆる製品の原材料の価値の変化を」リカードが顧慮しなかったのは、スラッファが注を付けたパラグラフ (32) の最後の文章に限られるのではなく、『利潤にかんするエッセイ』の全体的特徴の一つなのである。それは、彼の「知的構築物」をできるだけ容易に構築するために、彼が取り急ぎ置いた単純化の仮定であった。そうして、彼が性急に過ぎず、慎重を期していたとしたならば、それは真実により近く接近するために修正することができたであろうところのものであったのである。それゆえ、彼はマルサスに宛てた上掲の書簡でこう訴えたのである。すなわち、「私の著述の出来上りがこのように不完全なものになってしまったことは、私には屈辱 (a matter of mortification) です。私は性急過ぎました。そうして、これらの問題の表面をなぞるだけの人々は言うに及ばず、このような論題に慣れている人々にさえも、私の考えをわかるように述

べていなかったのです」と。

さて次に、われわれはスラッファの注の指示に従って、ウェストの『エッセイ』の38ページの一節を見ることにしよう。ウェストはこう述べている。

「原生産物 (rude produce) が、改良の進行するなかで、価格騰貴することは、理論とともに経験の証明するところである。原生産物の価格のこのような上昇は、労働の賃金の上昇を招き、そうしてまた、原生産物の騰貴自体が製造業のあらゆる製品に多少とも伝播する。もちろん、その成分として原生産物が支配的になっている製品に主として伝播するのであるけれども、職人の技能に比較して原生産物が小さな位置を占めるにすぎない精巧な製品には、より小さな度合で伝播することもまた明らかである。」⁵⁴⁾

なるほどこの一節は、リカードの上掲書簡に付けられたスラッファの注 (3) が指摘するリカードの言葉に符合している。そこで、リカードがウェストのこの意見を、通常の意味において、「採っている」(to adopt) ものと仮定してみよう。さらに臆測を進めて、リカードがウェストのこの一節を読んだとき、彼は初めてこの論理に気づいたのであると仮定してみよう。そのときに、リカードが自分の『利潤にかんするエッセイ』の不出来を痛感したのであるとするならば、彼がマルサスに宛た書簡の中で「私の著述の出来上りがこのように不完全なものになってしまったことは、私には屈辱 (a matter of mortification) です」と訴えるとき、それはウェストの『エッセイ』を意識してのことであると臆測を重ねることができかもしれない。しかしながら、マルサスとの交信の中に顯われているリカードの人柄に照らすとき、このような臆測は真実から遠く隔っている。リカードにとってそれが残念に思われたのは、何をおいても、ほとんどの読者にとって彼のパンフレ

54) West, *op. cit.*, p. 38, reprinted on page 31 of Hollander's edition.

ットが難解なものと受け取られている事実に基づくものと考えられるからである。それゆえにこそ、リカードはマルサスに宛た上掲書簡の劈頭で、経済学者たちの反応を知りたいという彼の気持をにおわせているのである。

じっさい、上に引用したウエストの一節の最初の文章が示す問題意識はウエストだけのものではない。たとえば、リカードのパラグラフ(32)に付せられている脚注†の最初の文章はこうなっている。すなわち、

「†穀物の追加量の調節をよりいっそう困難にする諸原因は、進歩しつつある国では、絶えず作用しているのであるが、他方において、農業の、あるいは、耕作機具の顕著な改良は、それほど頻繁に起こるものではない」と。

この文章を、リカードの「価値の理論」に照らして見ると、それはウエストの「原生産物が、改良の進行するなかで、価格騰貴する」という事実認識と一致するのである。リカードの心の底には、おそらく、ウエストの『エッセイ』に接する以前から、彼の『知的構築物』を取り急ぎ構築するために置いた単純化の仮定が彼の事実認識の表現として必ずしも意に沿うものではないという不満が横たわっていて、もしもいま少しの時間的余裕があったとしたなら、その仮定を彼のその認識に沿うよう、自づから修正することができるであろうという思いを伴っていたのであろう。

われわれは、ここで、さらにボナーの注〔1〕の指示に従って、リカードの『経済学および課税の原理』に目を転じ、リカードが『利潤にかんするエッセイ』の議論の不完全さをどのような形で修正するに至るかを見ることにしよう。その場所が、彼の『原理』の第Ⅰ章「価値について」の中ではなく、第Ⅵ章「利潤について」の中に置かれていることは、彼が『原理』において、価値の理論を本格的に構築しようとしたときにとった一つの基本的方針を示唆しているように思われる。それはともかく、リカードはこう述べている。

「原生産物 (raw produce) の騰貴によって価格に多少とも影響を受けることのない商品はほとんどない。なぜなら、土地から生まれる一部の原材料が、たいていの商品の成分として含まれているからである。木綿製品、リンネル製品、および生地は、小麦の騰貴に伴なって、すべて価格が上昇するであろう。しかし、それらが騰貴するのは、それらが作られる原材料の生産に、より多くの労働量が投ぜられるためであって、それらの生産のために雇用された労働者たちに製造業者がより多くの支払いをするためではない。」⁵⁵⁾

リカードが、この過程を彼の価値の理論に基づいて述べている点は、ウエストの上掲引用文には見られないリカード独自の思考形式であることに注目しよう。そうして、その価値の理論は、『利潤にかんするエッセイ』のパラグラフ(32)に表明されているところの「価値の理論」で十分にこと足りる体のものであることから、リカードがこのパンフレットを執筆していた時点において、すなわち、彼がウエストの『エッセイ』に接する以前において、この点にかんする彼の思考が相当に熟したものでありえたと推測できる余地が残されているように思われる。このような事情のあるとき、マルサス宛の書簡においてリカードが述べている言葉を捉えて、彼が「ウエストの意見を採用している (to adopt)」と評することに、筆者は一抹の危惧の念を禁じえないのである。

以上の議論は、リカードに対する筆者の思入れを正当化するためになされたのではないことを、最後に付言しておきたい。すでに、われわれは、経済学上の観念の創造にかんする先取権の問題を、リカード対ウエストの場合だけでなく、ソーントン対ローンジの場合⁵⁶⁾にも見て

55) Ricardo, *Principles*, in Sraffa's edition, pp. 117-118, and McCulloch's edition, p. 65.

56) 拙稿「賃金基金説の系譜について(1)」(本誌第34巻第1号)の、とりわけ第Ⅴ-Ⅶ節, pp. 154 (154)-158 (158)を見よ。

いる。じっさい、経済学の歴史の中には、このような問題は他にもいろいろと存在する。歴史の世界において、われわれの観念が想像力の翼を得て羽ばたこうとするとき、それを現実の基盤につなぎ止めるものは、歴史上の時間にかかわる記録である。しかしながら、他方において、これらの記録ないし史料の機械的な適用は、たとえば、ノーベル賞候補者の選考といったような事務上のルールとしては便利でありえても、新しい観念の創造に関与してきた人々の思想のありようの真実を明らかにするうえで有益であるとはかぎらない。人の胸中に育つ観念が著作物の形をとるまでには、かなり長い時間の経過を必要とし、そうして、その間にさまざま

な事情が介在するであろうことは、われわれの個人的経験に照らして、容易に了解することができる。そうして、残された記録がかつて実在した氷山の一角にすぎないことも、また、われわれのよく知るところである。リカードがウエストの『エッセイ』に初めて接した時点と、彼がマルサス宛の書簡を書いた時点との前後関係は、その書簡の内容から動かし難い事実と判定されるではあろうけれども、その時間的前後関係だけに基づいて、直ちに、「リカードは、この書簡でウエストの意見を採用している」と評するのは、あまりに機械的な判定と言えないであろうか。

(この項続く)